

群馬北辺の弥生社会

——後期弥生集落の分析から——

大木 紳一郎

- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 弥生社会の形成とその変遷 |
| 2. 沼田周辺地域の土器編年 | 5. 総括 |
| 3. 弥生集落の分布と構造 | |

——論文要旨——

弥生時代から古墳時代への変化は、文物のみならず社会構造の大きな変化をもたらした。それは、新たな社会の形成であり、同時に地域に根ざした弥生社会の崩壊をも意味する。群馬県では、東海地方西部を起点とするS字甕に象徴される文化の伝播、ないしは集団の移動によって、古墳社会形成の端緒がひらかれた、と理解されている。古墳出現の背景、大規模水田開発、土器の大転換といったキーワードで古墳時代と弥生時代を対位させ、その歴史的な意義について多くの論者によって語られてきた経緯がある。しかしその多くは、統一史観が色濃く反映された、古墳文化の側からみた理解であったように思える。本稿では、古墳文化の普及が他よりも遅れたと考えられている群馬県北辺地域を対象として、その背景を解明するために、まずどのような弥生社会が形成されていたのか、そして時代の大きな変化にどのように対応したのかを明らかにしようとするものである。まず、群馬北辺における弥生社会の主要範囲である沼田台地周辺を対象地域として設定し、集落群の分布様相とその形成過程の把握を試みた。その前提として、時間軸となる土器編年を再検討し、従来「弥生後期後半」と一括して扱われてきた時期を細分した。あわせて、地域としてのまとまりを把握する手段として土器の地域色の把握に努めた。それらの検討により、時空的な位置づけを与えられた集落遺跡群を相互に関連づけることで、弥生社会の形成と変遷の動態を明らかにした。また、立地条件や存続期間、集落構造の特徴から、防御的性格を併せ持つ集落の意義について検討してみた。その結果、沼田地域における弥生社会は、後期中葉から始まり古墳時代前期には解体すること、その変遷過程において環濠集落の形成と廃絶、拠点集落の成立、小村の分散、移住、合併といった動態がうかがわれること等が明らかになり、このような変遷を促す大きな要因として、「倭国乱」「邪馬台国連合と狗奴国との争乱」といった時代背景が関わった可能性についても言及した。

キーワード

対象時代 弥生時代後期

対象地域 群馬県北部

研究対象 弥生集落の動態

1. はじめに

旧社会が新しい文化を受容し、新たな社会に変革しようとするとき、また異なる社会体制のなかに組み込まれようとするとき、彼らはいったいどのように行動し、何を目指して変化を遂げていったのだろうか。日本史の流れの中で、弥生時代から古墳時代への転換は社会構造そのものを大きく変えるできごとだった。地域社会を形成してきた弥生びと達にとって、まさにそのような大きな歴史上の岐路を乗り越るために、その対応が迫られたときであった。

東海西部地域を起点としたS字甕を主体とする土器群の東遷は、群馬の地に至って定着する。その前段階でも遠隔地からの土器の流入現象が活発化し、その背景には弥生社会全体を揺るがすような列島的規模の大きな動きがあったと想定されている。群馬県の古墳社会形成は、そのような外来的インパクトによって引き起こされ、最終的には群馬県全域を巻き込んだ地域社会の再構成という形で決着したと理解される。その過程や背景の解釈については、主に古墳文化形成史の側面から、多くの論者によって語られてきた。群馬県域への「植民説」などはその代表といえるだろう。S字甕を主体的に使用する集団（ここでは仮に「石田川集団」と呼称する）の存在を想定し、彼らを主人公として、あるいはその主導者として古墳社会が形成された、との解釈が大多数の考え方であろう。だが、実態として「移住民」がどのような集団として存在し、古墳文化形成にどのように関わったものなのか、具体的な論証は充分になされているとは言い難い。その点については、「植民」や「移住」という現象まで考える必要はないとの反論（友廣 2003ほか）もあるが、少数意見として留まっているのが現状であろう。

筆者は、S字甕の持つ規格性の高さや、製作技術上の画一性、広範かつ大量の普及という事象からみて、地域色に彩られた後期弥生土器と異なり、専門的な工人集団による生産供給体制が存在したと考えている。それに従事した者達こそ、東海地方からの「移住民」だったのでないだろうか。S字甕を主体的に用いる石田川集団のうち、受容する側であればその出自を東海地方に求める必要はない。土器からいえるのはその辺りまでである。群馬県における古墳社会形成に、東海勢力の果たした役割はけっして小さくないと思うし、必ずしも過小評価するわけではない。だがそれを正当に評価するには、東海地方と関連する考古遺物や、墓制、集落形態、祭祀形態などの状況証拠を丹念に積み重ねていくこと以外にはないと考えている。

このように、群馬県における古墳社会形成の主役として、常に主張されてきたのは石田川集団の動向であり、その果たした役割の大きさであった。だが実態はどうだったのか。それまで地域社会を創り上げてきた在地の

弥生びと達は、この歴史の荒波に対してどう対応したのだろうか。自ずから日用土器としてS字甕を採用し、「石田川集団」に変貌した場合もあろうし、新たな地域再編に抵抗を続けた集団もいたはずである。そこには、地域弥生社会のもつ地理的環境や利害関係、集団内規範や集団間の絆の強弱など、多様な条件によって、各々の集団毎に、能動的な変貌はもとより、妥協、服従、抵抗などの様々な対応が迫られたことだろう。そのような弥生びと達の対応の実相を明らかにすることで、古墳社会への転換が歴史上に示す意義を、別の側面から評価できるのではないかと考えるのである。それは、新たな時代を迎えるとする弥生びと達の視点に立つことであり、この時代を古墳前史ではなく、弥生時代の続史として扱うことになるだろう。

以上のような問題意識の上に立ち、本稿では最も遅れて古墳文化を受容したと捉えられている群馬県北辺地域（具体的には沼田市周辺地域）の弥生社会を取り上げ、その形成史と動態を明らかにすることを目的とし、やがて地域再編を達成することになる、古墳社会形成史の地域的実相を探ろうと思う。沼田周辺地域を取り上げたのは、待望久しかった沼田市日影平遺跡の報告書が刊行され、県内でも希有な後期環濠集落の全貌が明らかにされたことが、その契機になったのは間違いない。また、既に公表されていた戸神諏訪遺跡や石墨遺跡、糸井宮前遺跡等の、弥生後期～古墳前期の集落遺跡に関して、地域社会内での位置づけをめぐる再評価の機会を窺っていたことも確かだ。

集落動態から地域弥生社会の変貌を探る、との試みは、すでに榛名山東南麓地域を中心に緒論を展開した若狭徹の業績（若狭 1989・1990）がある。本稿で行う弥生集落の分析も、氏の考え方方に強く刺激されたところが多い。及ばずながら、地域を替えて同様の検討を試みるに過ぎないのだが、充分な検討資料という条件さえ整えば、他の各地域においても、独自の弥生社会形成史が解明され得ると考えるべきだと考える。

弥生集落の一部しか判明していない大多数の遺跡例をもとに、集落動態や弥生社会形成史まで解明しようとの試みは、ともすれば、憶測に依拠しただけの空論に陥る危惧が無いわけではない。だが、たとえそのような仮説だったとしても、不確定要素を恐れるあまりに、モデルケースに準じた図式的理解に終止することは、独自の歩みを留めていたはずの地域形成史を、正当に解釈することには繋がらないと考える。対象を一地域に限定した理由もまた、そこにある。

2. 沼田周辺地域の土器編年

(1) 標式土器編年の概観

まず、本論の分析対象となる弥生集落の時間軸上の位

置づけを明確にするために、沼田周辺地域における弥生土器編年について概観し、更に後期後半に相当するV—3期（若狭 1996）の細分案について検討することにしよう。なお本論では、土器編年の時期区分名称について、若狭徹の提示したI～V期の5期区分名に従い、必要に応じて「前期・中期・後期」の呼称を付すこととする。

沼田周辺地域におけるIII期（中期中葉）以前の資料は断片的で分布も非常に稀薄であり、現状で遺構に伴う例はほとんど知られていない。

月夜野町八束脛洞窟遺跡は、再葬墓関連の人骨を出土した遺跡として知られており、ここからIII期に遡る土器片が出土している。中期後半にあたるIV期¹⁾では、栗林式（竜見町式）²⁾を出土する住居跡が利根郡白沢村寺谷遺跡で検出されており（図1、4～10）、また利根郡昭和村川額軍原遺跡からは単独の壺棺墓（図1—1～3）が検出されている。調査による発掘資料ではないが、利根郡川場村立岩から出土した川原町口式あるいは山草荷式とも比定される完形の壺は搬入品の可能性も考えられ、この時期における東北地方南部との直接的な交流の存在を裏付けるものとして注目される。

IV期に続く後期初頭のV—1期についても、出土資料は稀少だ。利根郡月夜野町十二原遺跡4号住居跡から出土した樽式の一括資料（図2）が注目に値するのみである。ただし住居跡1棟のみであり、同遺跡及び周辺地点ではこれに後続する遺構は判明していない。同様に後期前半にあたるV—2期の資料も少ないが、同一遺跡内でこれ以降に後続するV—3期の樽式土器が豊富に見られる例が数々所知られる。従って現在判明している資料による限り、沼田周辺地域における長期定着型の集落形成はV—2期からと考えて良さそうだ。そこで、V—2期以降の土器群について、沼田周辺地域を対象とした編年細分案を検討してみたいと思う。

ところで、樽式土器が後期の土器としての編年的位置を獲得して以後、その時期細分作業については、井上・柿沼両氏によって二分されたのが最初といえる。甘楽郡甘楽町笠遺跡出土資料を代表とするA類、水沼遺跡出土資料をB類として古新の2時期に分けたのがそれだ（井上・柿沼 1977）。樽式に先行する栗林式（竜見町式）と水沼遺跡資料との中間的な器形や文様をA類として位置づけたわけで、類縁関係の強い長野県における栗林式→吉田式→箱清水式の変遷を視野に入れてのことと思われる。また、B類よりも古相で異系統の可能性のある剣崎遺跡や分郷八崎遺跡例をB'類として分離した。さらに弥生終末期に位置づけられていた石田川式に近似する様相がみられるとして、東小学校遺跡例をB類でも最新段階に位置づけ、樽式B類がさらに時期的細分できる可能性についても言及した。

相京建史・三宅敦氣は県内各地の発掘調査で急増した

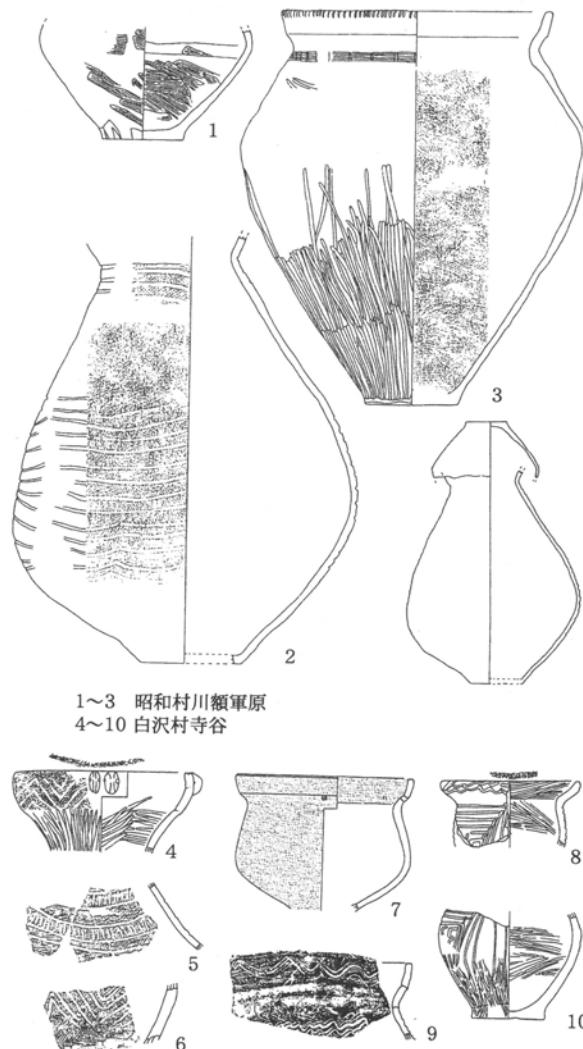


図1 沼田周辺地域のIV期の土器

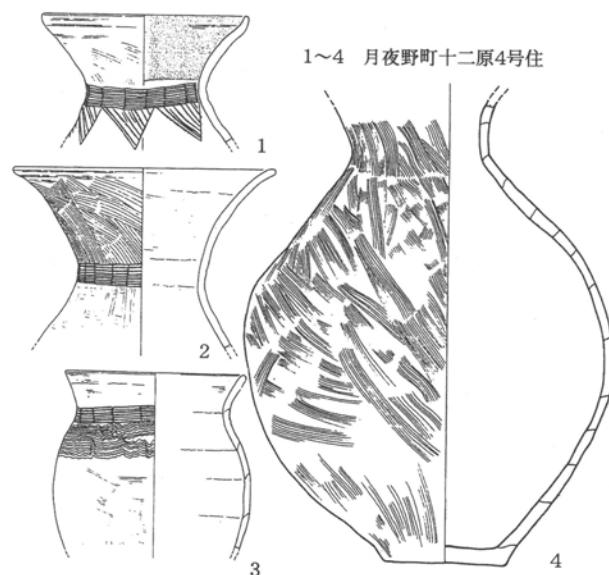


図2 沼田周辺地域V—1期の土器

豊富な資料を用いて、4時期細分を行った（三宅・相京1982）。井上・柿沼のA類をI・II期、B類をIII、そして土師器への移行期としてとらえうる段階をIV期とした。注目されるのは、遺跡分布の在りようから群馬県に5地域を想定し、特に資料の多い榛名山東南麓と赤城山南麓の両地域を比較して、樽式のなかの地域差の存在に言及したことだ。ただしここでは、両地域の差は大同小異であるとし、各地域色の抽出は後の課題であると指針を示すにとどまった。飯島克巳・若狭徹は榛名山南麓の豊富な資料を用いて、器形と文様の変遷過程から各器種の型式組列を導きだし、共伴出土例から器種組成を検討、そしてその時間的先後関係をもとに、1～3期の3時期区分を行った（飯島・若狭1986）。また、県内の樽式分布地域を5地域に分け、それぞれの地域でこの3時期区分が通用することを検証した。そして、この地域別検証において、笹遺跡例で見るよう鎌川流域では榛名山南麓とは異なる地域色が見られること、利根川上流域では地域色として抽出しうる甕の存在を指摘した。なお、相京・三宅の提示した第IV期については、すでに樽式のもっていた様式構造が崩れているとの考え方から、樽式から除外している。

高崎市新保遺跡の出土資料を用いた佐藤明人の編年（佐藤1988）、県内全域を扱った入沢雪絵・加部二生の編年（入沢・加部2000）も、飯島・若狭の編年観とほぼ同様の結論を示している。すなわち、後期にあたる樽式の3期区分編年であり、後に若狭は県内の弥生土器をI～V期に大別し、後期にあたる時期をV期と呼称したが、細分内容に基本的な変更はみられない（若狭1996）。

以上にみたように、土師器への移行期を弥生・古墳時代のどちらに含めるかという議論をのぞけば、樽式の3分案はすでに研究者間でほぼ定着していると言っている。飯島・若狭が検証したように、群馬県全域を対象とした場合、この3期区分が有効なのは確かだ。しかしその一方で、地域によってその変遷過程が微妙に異なっており、それはV-3期に顕現化する地域色の発生と展開を読み解くことで明らかとなる。

本稿で対象とする沼田周辺地域の土器編年については、戸神諏訪遺跡、糸井宮前遺跡、石墨遺跡等の報文の中で、それぞれの遺跡出土資料の位置づけが行われている。ここで編年細分の検討に先立って、簡単に触れておこうと思う。

石墨遺跡以外は、各器種の型式分類を行った上で、主に住居跡共伴資料をもとに時期細分を試みている。時間的先後関係の判断は、樽式だけで構成される段階から土師器に転換する段階への変遷と捉え、その間に移行期を設定するか否かという点に若干の相違がうかがえる。同一の集落で、ほぼ時間幅を共有するにもかかわらず、戸神諏訪遺跡では4期区分、戸神諏訪III遺跡では2期区分

としているのは、この移行期に対する考え方の違いによる。ただ、いずれも弥生終末期～古墳時代前期との時間幅で捉えることは共通している。石墨遺跡では、土器そのものではなく、住居形態の変遷に新旧時間差を求めることで編年細分を試みた。土器の編年作成手続きとしては変則であるが、結果は戸神諏訪遺跡と同様の編年観を導き出している。それらの編年観に従えば、戸神諏訪遺跡から糸井宮前遺跡までが非常に短い時間幅でしか捉えられないことになる。だが、これらの遺跡で検出された住居群には、重複関係や著しい密集状況が認められることから、実際にはより長い時間幅を想定せざるを得ないのではないか。かつて筆者は、富岡市にある中高瀬觀音山遺跡と南蛇井増光寺遺跡の土器編年細分案を手がけた際、V-3期として一括されていた樽式土器が、地域や遺跡を限れば時期細分は可能であり、思いのほか長い時間幅を有することに気付かされた経緯がある。これまで後期後半あるいは後期末～古墳時代前期として扱われることの多かった、沼田地方のこれらの集落遺跡についても、同様な捉え方が可能ではないかと考えている。それには、土器の先後関係を保証する型式組列の検証と、同時性を保証する厳密な意味での共伴関係の再検討が必要だ。このような作業は、個別遺跡での限られた資料だけでは困難であったと思われるが、戸神諏訪遺跡や糸井宮前遺跡の成果が公表されてから10年余りたった現在、日影平遺跡をはじめとする沼田市周辺地域の新たな弥生土器資料が続々と公表されたことで、地域を対象とする土器編年あるいは地域色の検討が可能な時機がようやく到來したと考えている。本稿のはじめに、従来の編年観を見直し、新たな編年細分案を提示しようとする所以も、これら新資料の公表に促された感が強い。

後述する編年案作成の対象としては、これまでに公表された沼田周辺地域の樽式土器にできる限り限定した。その際に問題となる共伴関係については、同時存在の厳密性を保つため、竪穴住居出土遺物のなかでも、同時性の疑われる埋土中の土器はもちろん、床面に接していても埋没過程での廃棄の可能性が考えられる中央付近出土品は一括遺物として扱わなかった。また、壁際や炉内、貯蔵穴などからの出土であっても、小破片資料は流れ込みの可能性が考えられるため、二次的な資料として扱った。可能な限り、このような厳しい条件を設けて共伴資料の抽出に努めたが、廃棄時の一括性が認められる完形品や大型破片に関しては、不足を補うための補完資料として参考にした。なお、出土位置の認定は、報告書所載の遺物出土状況記録に準拠したため、完形品であっても位置の不明瞭な資料に関しては割愛せざるを得なかつた。また、器形の細かな特徴や文様、整形技法についても報告書所載記録に追うところが大きい。後日の資料実見により訂正余儀なき部分も生じるのではないかと危惧

もされるが、あらかじめことわっておきたい。

(2) 樽式土器の器種と型式的特徴

ここではまず、沼田周辺地域における樽式土器、とりわけ本論で取り扱うV—3期（後期後半）について型式的特徴と器種組成について略述しておく。

図3に掲げた土器がV—3期の主要な型式的特徴をもつ代表的な器種である。ここにみる型式的特徴はV—3期の時間幅をとおして不变と考えるものである。まず各器種毎にその特徴を述べ、のちに経時的变化の把握できる壺と甕について組列を試みるつもりである。

大型壺 器高50cmを越える大型品。「ラッパ」状に開く口縁と倒卵形か球形の胴部の器形で、口縁は矮小化した一段の折り返し口縁が主流を占める。文様は頸部に簾状文、肩部への櫛描波状文と櫛描垂下文が主流。垂下文下端に円形貼付け文を付すのが基本構成。口縁部には櫛描波状文を施す場合もある。なお、肩部に櫛描T字文を施す例も知られるが、これは箱清水式の影響。整形は外面が研磨、内面はなでか刷毛目。赤彩は箱清水式の影響の強い例以外には見られない。

中・小型壺 器高30cm以下。器形の特徴は大型壺と同じ。折り返し口縁と単口縁がある。文様は、頸部簾状文と肩部櫛描波状文が主流で、簾状文の代わりにT字文を施す例もみる。ここでも大型壺と同様に肩部波状文に櫛描垂下文を加飾する例がある。口縁部への施文はほとんどみられない。また量的に少ないが赤彩品もある。整形は大型壺と同じ。

短頸壺 図示できる完形品がないが、他地域例から短く開く単口縁に肩の張る球状胴部の器形をもつと考えられる。基本的に赤彩で頸部に簾状文か櫛描横線文を施す。なお、器高10cm以下の小型品もあり、口縁の緊縛孔から常時蓋を伴ったことが明らかである。

甕 器高20~40cmにほぼ含まれる。外反するやや長目の口縁と胴部の強く張る器形。口縁には折り返しと単口縁の二種がみられる。文様は口縁から肩部付近までを櫛描波状文で充填し、頸部を簾状文で画するものがほぼ半数を占める。口縁から頸部にかけてくびれる形状や胴部の膨張形状などにいくつかのバラエティーがみられ、ここに地域色や経時的变化を看取ることができる。整形は内外面とも無文部を研磨する³⁾。

小型甕 器高15cm前後からそれ以下のものを含める。器形は口縁が短く外反し、胴部は張るが胴径が口径と同じかそれ以下のものが多い。文様や整形は甕と同様である。

大型高杯 杯部形状で三種に分類できる。直状か内湾きみに開くA類、杯部中位で直立か内傾し口縁で外折するB類、杯部中位から屈折して外反するC類で、数量的にはA類が主流。脚部はいずれも円錐形が基調。いずれも赤彩品が多く、B類は口縁下の直立部分にしばしば櫛描

文で加飾する。なお箱清水式には口縁が曲線的に開く形態が知られるが、沼田周辺ではほとんどみられない。またC類は類例が少なく、図示例は口縁部の瘤状貼付や脚部の三角形透かし孔から箱清水式の影響と考える。

小型高杯 大型高杯A類と同様の形状。赤彩品のほか無彩品もあり、新しくなるにつれその比率が増す。また少數ながら杯部が小振りで直線的に開く例もみられ、地域色として捉える可能性を示す。

台付甕 口径15cmを越える大振りのものから、口径10cm前後的小振りなもの、また口径と器高が10cm以下の極小品までを含めた。口縁が短く外反し球形に近い胴部と円錐形に開く脚部が標準形。文様と整形は甕と同様で、口縁と胴部に円形貼付文を付す例がみられる。なお、極小品は容量が極めて小さいことや赤彩例もしばしばみられること、また加熱痕が認められないことから、「煮る」よりも「盛る」機能と考えられ、用途上の器種分類であれば高杯や鉢の一群に含まれよう。

小壺・小甕 口径・器高が10cm以下の極小品の類で、壺形を「小壺」、甕形を「小甕」と呼ぶことにする。また台付甕形もこれに含めた。形状はいずれも中・小型壺、甕のミニチュアと呼ぶにふさわしいが、文様や研磨による整形、小壺にみられる口縁緊縛孔などから、実用品である。少量の貯蔵や供膳、飲料用などの用途が想定される。

鉢 やや内湾する截頭円錐形で、口径15cm前後のものが多い。口径20cmを越える大型品もあるが器形は同じである。また少量だが小さな片口の付く例もみられる。赤彩品と無彩品がみられるのは小型高杯と同様。

有孔鉢 口径と器高がほぼ同大の截頭円錐形で、口縁形状に単口縁と折り返しの二者がみられる。また底部孔は中央一孔が標準だが、多孔も少數みられる。整形は研磨が基本で赤彩や施文などの加飾はしない。

蓋 円錐形の天井部に皿状の摘みを付す。頂部に穿孔の有無があり、いずれも甕用。なお、短頸壺の緊縛孔から小振りの壺用蓋も存在したはずだが、図示しうる好例がない。

片口鉢 深めで椀状に開く体部に注ぎ口を一ヶ所付けた器形。安定した平底と円錐形の脚付きの二者がある。また注口は筒状もみられるが少數。整形は撫でや粗い研磨が多く、基本的に加飾はされない。しばしば、内面から注口部にかけて白色灰状物の付着が認められ、他器種と異なる特殊な用途の専用器と考えたい⁴⁾。

(3) 地域色の検討

沼田周辺地域におけるV—3期の型式的特徴に、群馬県内他地域の樽式土器と比べていくつかの地域色といえる特徴を指摘することができる。ここでは対比資料の豊富な壺と甕について検討してみることにする。

壺の口縁形状について、沼田周辺地域は矮小な一段の折り返しにほぼ限られていて加飾が少ないのが特徴だ。

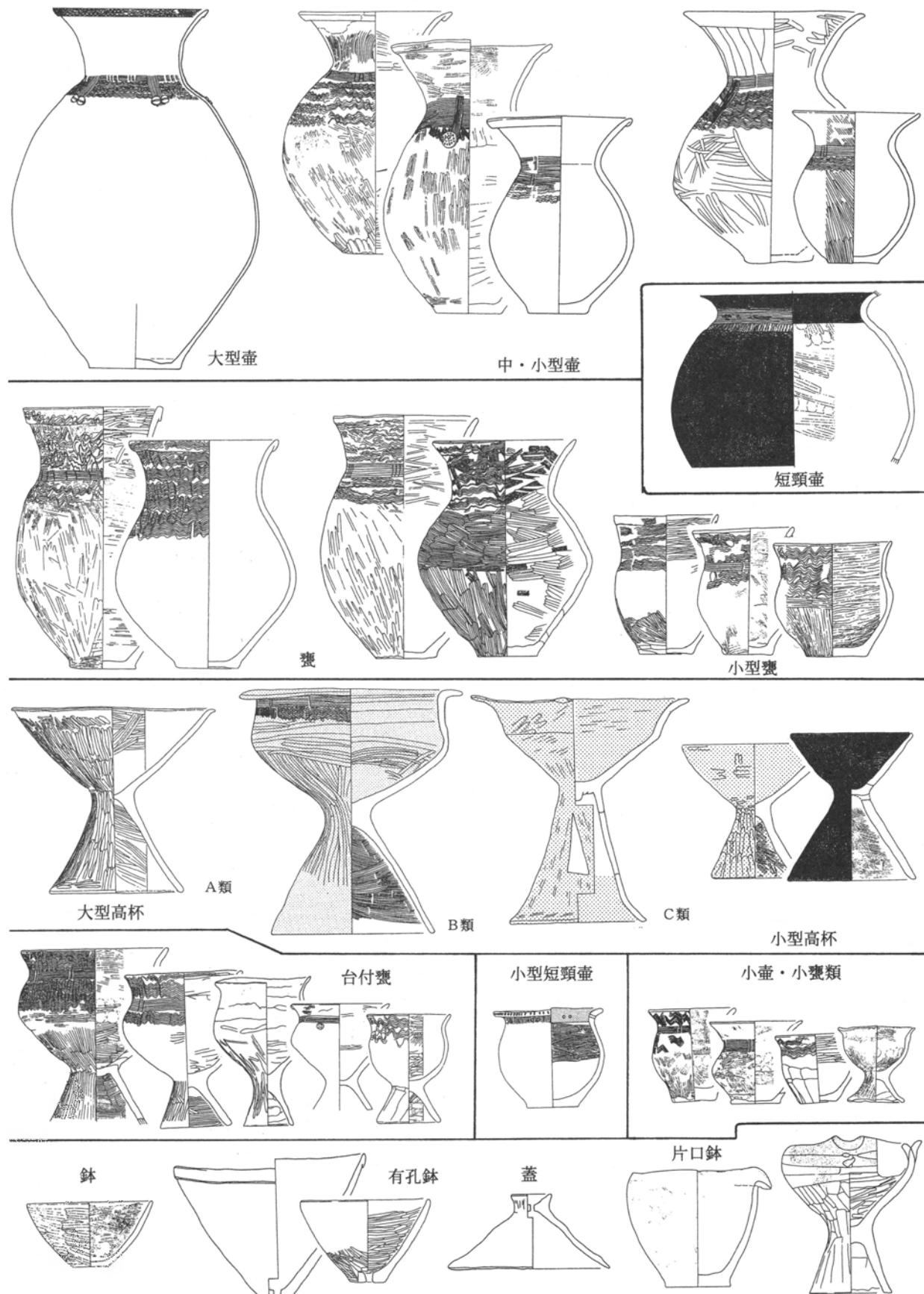


図3 V-3期の主要器種

一方、渋川・高崎地域では一段のもの以外に二段以上の多段折り返し口縁で、そこに刻みや刺突で加飾することが盛行する。文様では、頸部簾状文と肩部櫛描波状文の組み合わせを基本構成とし、これに箱清水式のT字文の影響を受けていくつかの類型が生まれる。沼田周辺地域では基本的な文様構成をそのままに、櫛描垂下文と端部の円形貼付文のみを加えたのが特徴だ。渋川地域では、頸部の簾状文をT字文に替えて肩部の櫛描波状文と組み合わせる構成を採用した(図4)。基本的な文様構成を同じくしながら、外来系の文様を受容するにあたって異なる文様デザインを作出したのだ。垂下文のみを取り込んだ沼田周辺地域では、特に横帯文様を縦線で区切るという文様モチーフの伝統があったわけではない。両地域で文様デザインに嗜好の差が生じたとしか言いようがない。あるいは、わずかな相違であれ自集団のアイデンティティーを表現したと理解すべきなのかもしれない。

甕はその器形に注目する必要がある。前述した器形の特徴は樽式に通有のものだが、沼田周辺地域では頸部屈曲の形状からさらに二種に細分できる。頸部が屈曲ぎみのA類と、緩やかな弧線を描くB類である。A類は頸部を境に上位の口縁側を外反、下位の胴部側を内湾ぎみに形成した結果であり、これに対してB類は胴部中位の最大幅部分から口縁までを弓なりにくびれる形状を目指したものと考えられる。このうちA類は県内各地で通有的一般的な器形だ。B類は他地域ではわずかな存在で、沼田周辺地域では全体のほぼ半数近くを占めるようだ⁵⁾。また文様については、一般的な簾状文と櫛描波状文の組み合わせのほかに、波状文のみを充填するものが多いとの指摘がある(佐藤 1988)。かつて筆者は月夜野町諏訪遺跡出土土器の検討から、B類の甕と波状文のみの文様構成とを関連づけ地域色の可能性を示唆したことがある(大木 1984)。B類や波状文のみを施文する例は少ないながら他地域でもみられることから、沼田周辺地域だけの地域色とは言い切れない。だが他地域に比べて量的な比率がかなり高いという印象は強い。次に施文部位についてだが、V—3期の甕は口縁から肩部までを櫛描文で充填することを指標的な特徴とする(飯島・若狭 1988)。これを基本形としながら、沼田周辺地域においては口縁～頸部を主要施文部位としており、肩部への施文に重点が置かれないと傾向がうかがえる。詳細な比較をするならば、高崎・渋川地域では肩部に櫛描波状文を3段以上重ねることで口縁部とほぼ同幅の文様帯をもつて対して、沼田周辺地域では肩部波状文帯が2段以下が多く無文例もみられる。樽式分布圈西端に位置する富岡地域では、これと逆に肩部施文のみで口縁部を無文とする文様構成が盛行し(大木 1997)、さらに峠を越えた北・中信の箱清水式では胴部下位付近まで幅広い波状文帯をもつことを特徴とする。このような甕施文部位の相違はV

—3期を通して終末期まで継続することから、地域色として定着した文様デザインと捉えていいだろう。

ここにみてきた土器の地域色は、樽式という一様式内での小変異、あるいは嗜好の傾向に過ぎないのだが、それが一定の時空的存在として認められる限り、その背景に土器製作における同一嗜好性を共有する人間集団のまとまりを想定することは許されよう。ただし、それが弥生地域社会のなかのどのようなレベルの集団に相当するのかという問題についてはここでは触れない。それには土器の文様や形にみるデザインが人間集団のどのような側面を表徴しているのか、あるいは土器製作そのものが集団社会のなかでどのような位置づけにあるのかといった理論的的前提のもとに解明されるべきと考えるからだ。ここでは壺と甕にみる地域色の存在を指摘するに止め、その変遷と地域内での在り方について検討する。

(4) 型式の組列と編年

ここではV—3期の樽式土器編年を細分するため、その時間軸となりうる壺と甕について、型式の組列について検討を行う。対象として選んだのは大型壺・中型壺・甕の三種である。各器種毎の類別と組列について以下に述べる(図5)。

大型壺 1～5類に分けられ、変化の方向性を①口縁部の外傾化②頸部の屈曲度③球胴化④文様の形骸化に求め、1類→5類へと順に変遷をたどるものと想定した。①②③の変化要素は個々に独立するのではなく、器形を形づくる各部位に分解したのに過ぎず、その変化が相互に関連していることはいうまでもない。



図4 地域色の比較

1類一口縁は外反ぎみに小さく開き、断面三角形状の折り返し粘土帯を付す。頸部は「く」の字状に近い弓なりの屈曲。肩部は直線的に開いて下膨れの胴部に続く。折り返し口縁の外面に櫛描波状文を主に施文、頸部の簾状文は等間隔止めか間隔の狭い二連止めで、肩部には数段からなる櫛描波状文帶。

2類一口縁はやや伸長し中位でやや角度をかえて外反し、端部は薄く短い折り返し。頸部は弱い「く」の字状に屈曲。肩部はやや膨らみをもって弱く内湾しながら下膨れの胴部に続く。頸部の簾状文は二連止めのほか多連止めもみられる。T字文の影響による櫛描垂下文がみられる。

3類一口縁は全体的に外反して開き、端部形状は2類と同じ。肩部の膨らみが強くなり、結果的に頸部は「く」の字状に強く屈曲する。胴部は最大幅がやや下位にあり、橢円形に近い形状もみられる。口縁はほとんど無文で、頸部～肩部の文様が部分的に省略されるものがみられる。

4類—図示した例は口縁を欠くが、3類と同様に大きく外反して開く。頸部屈曲は強く外折し、肩部が大きく膨らむため胴部は球形に近い。文様は3類と同じ。

5類一口縁は短く外反し端部が外折する。図示例では口縁端部の折り返しがない。頸部から胴部形状は4類と同様だが、上下にやや潰れた形状。文様はない。

大型壺の変遷過程をまとめれば、口縁の外反化と球胴化は同時に進行しており、それとともに胴幅が大きく、器高の低い形状へと変化する。文様では、樽式の基本形ともいえる頸部簾状文と肩部櫛描波状文の文様構成が1類ですでに確立しており、2類以降に沼田周辺の地域色として指摘した櫛描垂下文との組み合わせが主流となる。3類は最も類例が多く、口縁の外反度や胴部の球形度、さらに文様の省略度などで変化も多い。それだけ時間幅を有した可能性が高いが、ここでは細分を避けた。なお、4・5類は出土数が少なく図示例を代表とせざるを得なかった。

中型壺 5類に分けられ、大型壺と同様の変遷をたどるものと想定した。

1類一口縁は上半が直線的、下半から頸部が曲線的に外反して開き、端部は小さな折り返しとなる。頸部は細く締まるが曲線的な屈曲。直線的ななで肩で下膨れの胴部に続く。文様は口縁端部に波状文、頸部に簾状文（図示例は間隔の短い三連止め）、肩部に二段の櫛描波状文。

2類—1類に比べて口縁がやや伸長し、中位で屈曲して外反する。端部は折り返しと単口縁がみられる。頸部径が口径に対してやや大きく、屈曲は「く」の字に近い曲線。やや膨らみを持つなで肩で丸みを帯びた下膨れの胴部に続く。文様は頸部簾状文と肩部櫛描波状文の組み合わせにT字文の影響による櫛描垂下文が加わる。口縁端

部での施文が省略される例もみられる。類例が最も多く、変化もみられる。図示した二例は器高の高いものと低いもので、後者は口縁の開きが大きく球形に近い胴部形状から前者よりも3類に近い位置づけができる。

3類一口縁は大きく開いて端部では水平に近い。頸部は曲線的ながら強く屈曲し、胴部は球形。2類と同様の文様構成を残すが、部分的に省略する例が増える。口縁は無文。

4類一形状は3類に近いが、無文。口縁が短くなり頸部は鋭角的な曲線で屈曲する。整形では口縁～頸部外面の研磨が粗雑になる。

5類一無文。口縁端部の折り返しが痕跡的で、頸部の屈曲は稜をもって外折する。胴部は完全な球形か上下に潰れた橢円形。口縁内面や外面の口縁～肩部への研磨が省略される。

1類は全形が知られるのは少ないが、V—2期の形態に近い。大型壺と同様に、口縁外反化と球胴化が進み、さらに小型化も変化傾向として捉えられる。垂下文を加える文様構成は2類に始まり、以後省略化→無文の過程をたどる。2類が最も量的に多く変化もみられることから、時間幅が長いことが想定される。

甕 6類に分類され、さらに2～4類は前述したA・Bの二類に細分される。

1類一口唇部が内湾気味で口縁は短く直線的に外傾する。頸部は丸みをもった「く」字状。胴部は中位がやや張る橢円形。文様は口縁端部に櫛描波状文、口縁中位に間隔を空けた波状文帶、頸部は止間隔の狭い簾状文か波状文、肩部に2段程度の波状文帶。なお、肩部無文例もすでにみられる。図示例では内面を刷毛目整形としており、「内面研磨」がまだ十分に定着していない。沼田周辺地域での類例は少ない。

2 A類一口縁がやや伸長し、端部は折り返す。胴部形状は橢円形。口縁～頸部は櫛描波状文帶を重ねて充填し、頸部には簾状文。肩部には2段ほどの波状文帶。内面は丁寧な研磨。類例少なく、全形の判明するのは図示例のみ。

2 B類一口縁から胴部最大幅部分までが弓なりの曲線で、胴中位が強く張り出す。口縁端は単口縁にほぼ限られるようだ。文様と整形は2 A類と同様。

3 A類一口縁が伸長し弱く外反する。口縁端部の折り返しが多くなる。頸部のくびれは弱く屈曲。胴部は中位がやや張りだす。文様は2類と同様で、簾状文は二連止めが主。

3 B類一口縁と胴部形状は2 A類と同じ。頸部は弓なりの曲線を描く。文様は波状文のみの構成が多い。

4 A類一外反する口縁で端部がさらに小さく外反する。頸部の屈曲が強くなり、胴部は球形。また、口縁が短かく5類に近い例もみられる。文様は、頸部の簾状文が間

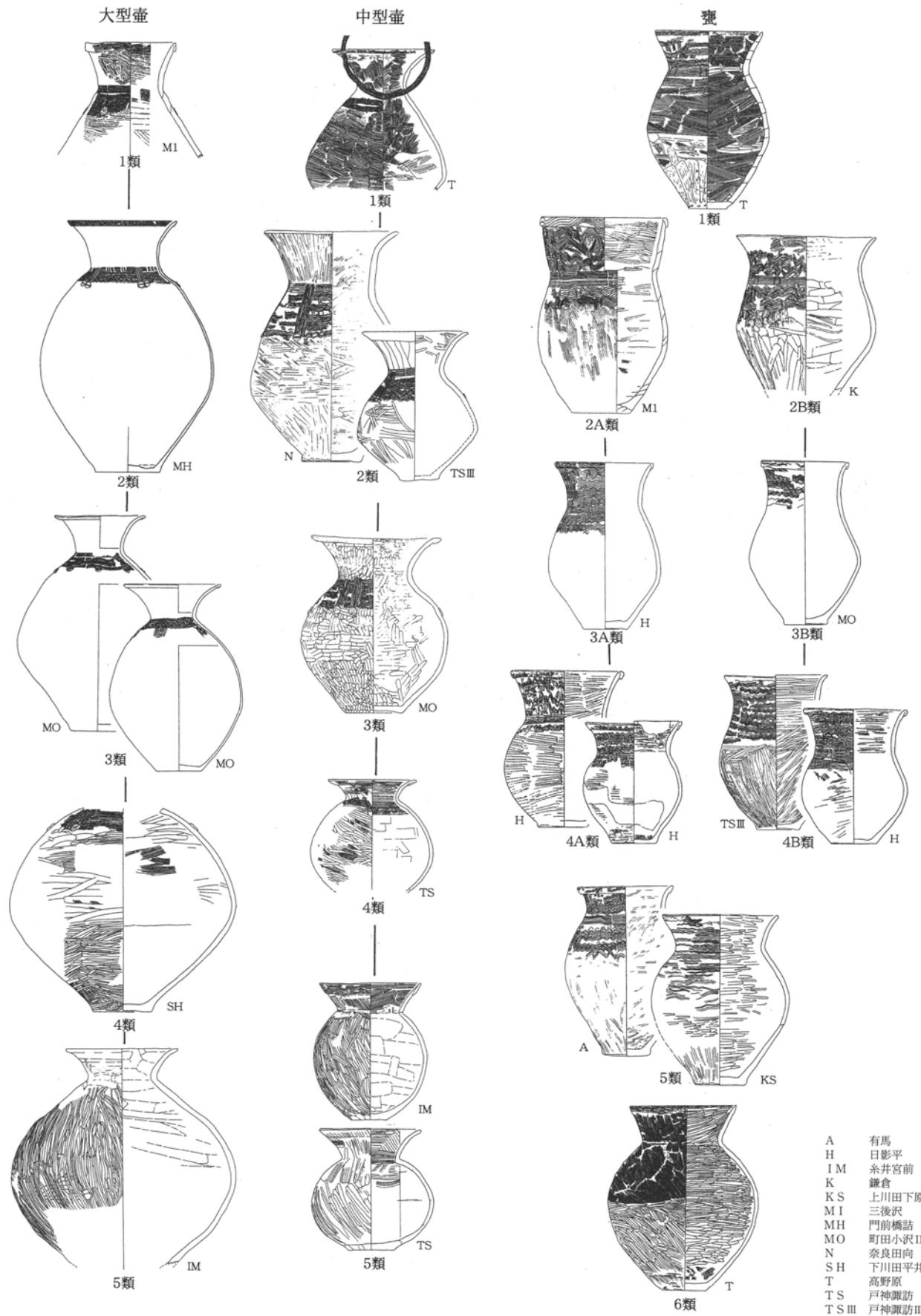


図5 壺と甕の組列

A	有馬
H	日影平
I M	糸井宮前
K	鍊倉
K S	上川田下原
M I	三後沢
M H	門前橋詰
M O	町田小沢II
N	奈良田向
S H	下川田平井
T	高野原
T S	戸神諏訪
T S III	戸神諏訪III

延びして多連止めが増える。

4 B類一口縁と胴部の形状は4 A類に準ずる。頸部は曲線的だが、球胴のため3 B類よりも強く締まる。5類一口縁が短小化し端部は外折気味、頸部は弱い「く」字状に屈曲する一群で、最大幅が上位で肩の張る胴部が多い。文様構成が乱れるか省略される例が現れ、これらは単口縁か痕跡的な折り返しの口縁端部を呈する場合が多い。5類のなかでも新しい一群として理解したい。なお、沼田周辺地域内では全形を知る資料がないため、ここでは渋川市有馬遺跡例を図示した。

6類一短く直線的に外折する口縁で、胴部は球形、無文。口縁端部は単口縁か痕跡的な折り返し。内面の研磨は維持されるが、口縁～胴上半の外面整形に刷毛目仕上げのものが現れる。

甕1類は類例が少ないが、若狭編年（1996）のV—2期新段階に併行すると考える。また2A類も少ない。この時期に属する遺跡数が稀少であることも考え得るが、占める時間が短く3A類に早い段階で変換を遂げた可能性が考えられよう。沼田周辺の地域色と捉えた甕B類は2類から始まり、口縁の短小化と球胴化が進んだ5類にはA・Bの区分は不明瞭となる。文様については、頸部簾状文と波状文の組み合わせ、及び波状文のみを充填する構成の両者とも、1類から5類まで維持されるようだ。波状文のみの文様構成はB類に多いとの傾向はうかがえるが、新しい段階のものほど増加するといった傾向は特に見いただせない。ここにみる甕の形状と文様にみられる変遷過程は壺と同調しており、様式構造全体の変遷過程であったことをうかがわせる。なお、ここでは図示していないが、甕6類に後続する例として、頸部径が広く器面への研磨を省略する一群が位置づけられる。ただし、すでに樽式としての残存要素がほとんどみられず、赤井戸・吉ヶ谷式系の無文化した例との区分が困難なため、組列から除いた。

以上に述べた壺と甕の組列について、同時性を保証する共伴関係から検証を試みることにする。対象となる資料は、竪穴住居跡から出土した土器群のうち、そこで使用されたまま遺棄されたと判断されるもの、壁際に近く床面上から出土したもの、貯蔵穴等の屋内施設から出土したものを同時性が高いと判断して取り上げ、さらに周辺地山からの流れ込みや後世の混在品を避けるため、そのなかから1/2以上の遺存度を保つものを抽出した。出土位置の確認は報告書に掲載された実測図・出土位置の記録・出土状況の写真から判断している。なお床面直上の出土であっても、住居中央部に集中するものは竪穴埋没途中における廃棄の可能性を考えられるので、完形品や遺存度の高い大型破損品であってもできる限り避けた。ただし上記のような厳しい条件下では検討資料が少なくデータ数としては不十分と考えられるので、それを

補うために廃棄時の一括性が高いと判断されたものを参考資料として用いた。共伴関係の検証に用いた資料は19遺跡、46例であり、詳細は以下に掲げる。

三後沢遺跡	Y 1・Y 2・Y 6・Y 7住
大原遺跡	3住
諫訪遺跡	1住
戸神諫訪遺跡	11・15・32・85・87・88・161住
戸神諫訪III遺跡	53・64・69・78・91住
石墨遺跡	A 12・B 6・B 11住
日影平遺跡	2・3・9・18住
下川田平井遺跡	10・12・24・25住
上川田下原遺跡	Y 1・Y 3住
赤坂遺跡	4・8・9住
町田小沢遺跡	21住
町田小沢II遺跡	1住
鎌倉遺跡	SJ 6・SJ 7住
上久屋橋場遺跡	1・2・A地区Y 2住
奈良原遺跡	2住
奈良田向遺跡	1住
高野原遺跡	6住
門前橋詰遺跡	2住
糸井宮前遺跡	57住

以上の検証資料の共伴関係から明らかになった同時存在率の高い型式相互の相関関係を図式で示す。

甕2類—中型壺2類—大型壺2・3類

甕3類—中型壺2類—大型壺2・3類

甕4類—中型壺2・3類—大型壺2・3類

甕5類—中型壺3・4類

甕6類—中型壺4・5類—(大型壺5類)

ここで明らかになった相関関係では、甕と中型壺の組列に矛盾はみられない。また同一器種間では、壺は2類—3類が、甕では2類—3類及び3類—4類に高い共伴率が認められる。これは連続する時間のなかで漸移的に変遷したと理解され、甕といえば2類→3類→4類への組列を保証するものであろう。大型壺については2・3類が甕2～4類のいずれにも共伴するが、他器種に比べて長い期間使用され続けたことの表れだろう。また中型壺についても2類が甕2～4類に伴うのは、長期継続的に用いられた可能性とともに、破損して以後も口頸部のみを転用器台として使用した床面出土例が多いことが影響している。また、大型壺1類・4類・5類、中型壺1類、甕1類については類例が極めて少ないとみられ、相関関係については保留した。特に大型壺については4類以降に激減しており、代わりに外来系の二重口縁壺が組成を占めると考えられる。最終段階に位置づけられる甕6類と共に伴する壺のほとんどが二重口縁壺であることはその

証左であろう。編年細分上の時間軸として考えた場合、甕と中型壺の組列が有効であり、可能な限り両者を併用することが望ましい。

ここに示した組列と、器種間の組み合わせから、以下のように時期細分を設定したい。

1期—大型壺1類・中型壺1類・甕1類

2期—中型壺2類・甕2類

3期古—中型壺2類・甕3類

3期新—中型壺2類・同3類・甕4類

4期—中型壺3類・同4類・甕5類

5期—中型壺4類・同5類・甕6類

ちなみに若狭編年（若狭 1996）との対比については、1期がV—2期、2～3期がV—3期、4期が古墳前期のI段階（若狭 1990）、5期がII段階にほぼ該当すると考えている⁶⁾。以上の時期区分に基づき、壺と甕の各類型と共に伴する他の器種を加えて作成した編年表を図6に掲げた。以下に各時期の概要について記す。

1期—壺・甕とも1類を主体とする。沼田周辺地域では住居跡例が稀少なため明確な共伴資料はない。従ってこの段階に相当すると想定される各器種の型式を例示した。これらは2類甕との共伴例がみられることから時間的に連続し、かつ2期まで残りうることを示す。

2期—壺・甕の2類を主とし、胴部が強く張り出す器形の特徴が台付甕や高杯・片口鉢などにも共通してみられる。鉢と有孔鉢は深めの逆台形。大型高杯はA・Bがみられ、A類は深めで直線的に開くものが存在する。

3期—大型壺3類・中型壺3・4類・甕3・4類が主体。これらは共伴する場合が多いため3期として扱ったが、中型壺3類・甕3類と胴部にやや張りを残すその他の器種を主体に組成される場合は古相、一方壺4類・甕4類を主とし、球形胴部に共通性をみると3期新相と細分する。新相では、高杯がやや浅く、片口鉢や有孔鉢にも浅く丸みを帯びた体部が見られる。なお、3期以降に箱清水式系の壺や高杯が共伴する例がしばしば見られる。

4期—5類の甕を指標とする。口縁が短く「く」字状に外反するのが特徴だが、胴部形状が上下に潰れた球形から肩の張る倒卵形まで変化があり、新旧に分離できる可能性を残す。壺については図示しうる好例を欠くが、3類のうち口縁が大きく開き球胴化の進んだものや文様構成の崩れた段階が伴うと考えられる。樽式の器種組成に東海地方西部の有稜高杯、小型器台が加わるのが大きな特徴。また客体ながら頸部が「く」字状に屈曲する単口縁台付甕が伴うのもこの時期からの特徴として注目される。

5期—壺と甕は無文のものが主体となる。また、「く」字状に屈曲する短い外傾口縁と球形胴部が定着する。赤井

戸・吉ヶ谷式の末期的痕跡とも考えられる口縁積み上げ痕を残した甕が現れるのも特徴。樽式の組成器種であった鉢・片口鉢・有孔鉢も球形化が著しい。古墳時代前期の主要器種である外来系の二重口縁壺や埴が組成に加わり、有稜高杯や小型高杯が樽式系の高杯を凌駕する。また、客体だがS字甕がこの時期から伴う。

図示はしていないが、これに後続する6期と呼ぶべき段階があり、二重口縁壺や研磨整形を省略した平底球胴の甕や鉢、S字甕、有稜高杯、埴、杯、器台の組成が定着し、樽式の特徴はほとんど見られなくなる。沼田周辺地域ではこの6期段階をもって集落が断絶するようであるが、これについては次節で述べる。

なお、沼田周辺地域と近縁関係をもつと想定される北信地域の箱清水式の編年（青木 1999）と対比するならば、共伴資料から3期古相が箱清水2式2段階、3期新相が同2式3段階にほぼ相当すると考えている。また、松本平の後期後半に相当すると考えられるJ字文模倣の壺が戸神諏訪遺跡77号住居跡から3期古相に伴って出土しており、交流範囲を必ずしも北信にのみ限る必要はないことを示している。S字甕については、樽式土器との共伴関係は不明瞭であるが、5期から確実と思われる共伴例をみる。図示した高野原遺跡5号住居跡例（図6最下段中央）は、内外面研磨という樽式甕の技法によって制作された模倣品で、口縁形状から廻間III式期（赤塚 1990）にまで下るものをモデルにしたと考えたい。ちなみに渋川地域の北橘村北町遺跡A区H3号住居跡からは、5期に相当する土器群に廻間II式期新段階相当のS字甕が伴っている。北町遺跡例と高野原例のS字甕を時間差と捉えれば、その型式変化は5期の時間幅の中に納まると考えていいだろう。S字甕を比較する限り、沼田地域への波及は遅かったと考えられる。このことについてはすでに田口一郎によって指摘されており（田口 1998・2000）、その波及源については、先行して受容・定着していた利根川水系低地域からの搬入と想定している。さらにS字甕を時間軸とした古墳時代の時期細分を行っており、I～VII期区分のうちIII～IV期が沼田地域への波及時期とした（田口 2000）。在地系弥生土器（樽式）を時間軸にした本論での編年と対比するならば、田口I・II期は5期以前に相当することになる。この編年上の交差部分については、S字甕をはじめとする外来系土器の受容の仕方によって、地域毎に時間幅が異なると思われ、また交差時期にも地域間でずれがあると予想される。場合によれば、遺跡単位での相違といったミクロな次元にまで及ぶ可能性も考えられるのではないか。沼田周辺地域の後期弥生土器編年について、その後半部分にあたるV—3期をさらに細分したのも、そのような編年上の「交差時間」を明確にしておきたかったことがひとつのかかけとなっている。

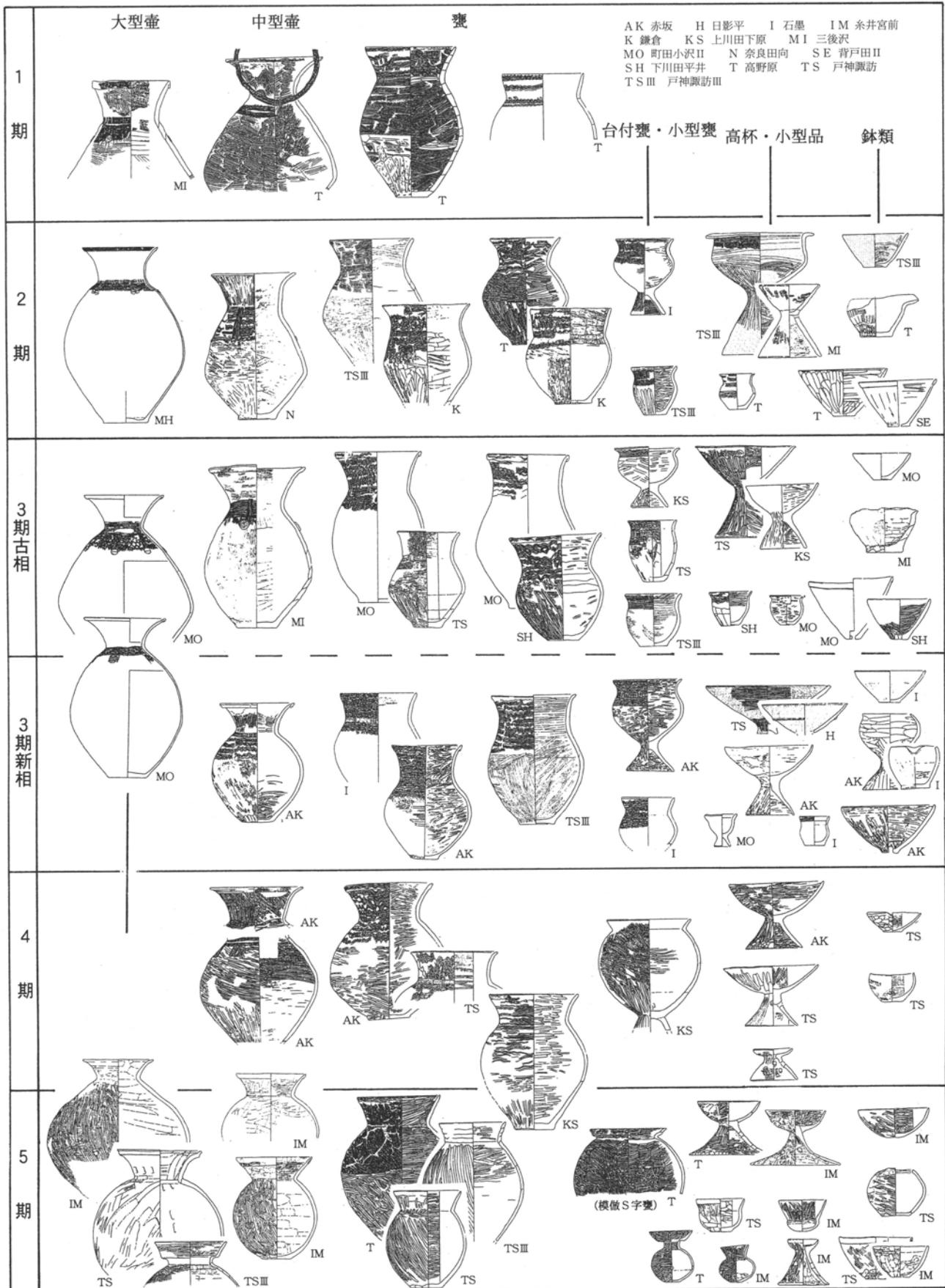


図6 北毛地域編年表

表1 遺跡の時期

遺跡名	棟数	IV期	V-1	1期	2期	3期古	3期新	4期	5期	6期
藪田遺跡	1					-	-	-	-	-
大原遺跡	2				-	-	-	-	-	-
十二原遺跡	6		-		-	-	-	-	-	-
三後沢遺跡	7			-	-	-	-	-	-	-
諏訪遺跡	1					-	-	-	-	-
上川田下原	10				-	-	-	-	-	-
赤坂遺跡	2					-	-	-	-	-
背戸田II遺跡	1			-	-					
下川田平井遺跡	15				-	-	-	-	-	-
戸神諏訪遺跡	66				-	-	-	-	-	-
戸神諏訪III遺跡	28				-	-	-	-	-	-
石墨遺跡	14				-	-	-	-	-	-
町田小沢遺跡	6					-	-	-	-	-
戸神吉田遺跡	3			-	-	-	-	-	-	-
向田遺跡	22			-	-			-	-	-
鎌倉遺跡	9			-	-	-	-	-	-	-
上久屋橋場遺跡	4				-	-	-	-	-	-
上光寺遺跡	2					-	-	-	-	-
奈良原遺跡	7				-	-	-	-	-	-
奈良田向遺跡	3			-	-	-	-	-	-	-
高野原遺跡	8			-	-	-	-	-	-	-
門前橋詰遺跡	2				-	-	-	-	-	-
門前舛海戸遺跡	1			-	-	-	-	-	-	-
寺谷遺跡	4	-			-	-	-	-	-	-
糸井宮前遺跡	35				-	-	-	-	-	-
中棚遺跡	5					-	-	-	-	-
日影平遺跡	30				-	-	-	-	-	-
見立溜井遺跡	10						-	-	-	-
北町遺跡	48					-	-	-	-	-
分郷八崎遺跡	7					-	-	-	-	-
有馬遺跡	83							-	-	-
有馬廃寺跡遺跡	2		-							
有馬条里遺跡	64	-								
中村遺跡	3	-								

(破線は存在が予想される時期)

さて、以上に示した編年で画期を設けるならば、壺文様にT字文の影響下に生成された垂下文が採用され定着すること、甕にV—3期の指標である櫛描波状文の充填とB類という地域色が出現することから1期と2期の間に、更に外来系の器種が加わり、甕が4類から5類へと大きく形態が変化すること、壺や甕にみられた地域色が消滅することから3期と4期の間に置くことができる。これは若狭編年におけるV—3期の始源と終末に等しい。なお、甕5類にみられる肩の張る倒卵器形の出現は、それまでの樽式の内因的変遷というよりも、同時期の箱清水式や、北陸や東海地方などの外来系の甕の器形と軌を一にするものと考えられ、その強い影響下に誕生した可能性を想定しておく必要があろう。

以上に掲げたV-3期(後期後半)の編年細分に従い、沼田地域周辺の弥生集落遺跡について、時期別グラフを表1に示した。これにより、各集落の開始と終末の時期、及び継続期間が把握できると思う。ただし、集落全体のうちの調査された遺構出土土器のみを対象としており、時期が若干前後する土器も含めて、遺構外の土器は除いたため、集落の実態はグラフで示したよりも時間幅が広がる可能性は充分考え得る。確実に存在した時期を実線で、存在する可能性が高いと考えられる場合には破線で示した。なお、対比のため南方の隣接地域である渋川地域(北群馬地域)の代表的な遺跡も掲げた。見立溜井～中村遺跡がそれである。

3. 弥生集落の分布と構造

(1) 地形的景觀

沼田周辺地域における弥生時代集落遺跡は、沼田市街地ののる沼田台地を中心に北方は月夜野町、南は昭和村、東は白沢村に拡がりを見せる。ここで簡単に分布地域の地形について述べておこう（図7）。

群馬県の最北部、新潟県境付近に源をもつ利根川は、利根郡域の山間を流下する幾筋かの支流を集めながら南下し、月夜野町で西方から流下してきた赤谷川と合流する。この合流地点から8kmほど南東方向に下ったのち、沼田市南部で栃木県境に源流を発する片品川と合する。ここから利根川は狭い峡谷を12kmほど南流して、吾妻川と合流する渋川地域に至る。月夜野町から沼田市にかけての間は河岸段丘が発達しており、特に利根川と片品川が合流する付近では、片品川によって形成された段丘が数段にも及ぶ。この利根川と片品川に挟まれた台地状の地形は、北に位置する三峰山塊に遮られて東西10km、南北5kmにわたる規模をもち、中央を北東から南西に貫流する薄根川によって南北に二分される。北半は南に緩傾斜する段丘面、南半は「沼田台地」と呼称される平坦面で、現在沼田市街地が形成されている部分にあたる。北半の段丘面には、北方の山間から流下する中小河川によ

る開析谷が発達し、面積が限定されながら洪水被害の少ない良好な水田可耕地を提供している。その標高は、約400～500mで、県内の弥生遺跡分布地のなかでは最も高所に位置するといえる。冷涼な冬季には降雪の多い地域としても知られ、現在の気候でも渋川地域との中間に位置する子持山を境にして南北で降雪量が大きく異なる。子持山東麓の山裾は狭隘な渓谷となっており、沼田地域と渋川地域以南とを結ぶ主要交通路でありながら、視覚的に両者を分かつ地理的境界となっている。

(2) 分布の様相と集落の特徴

ここでは、弥生集落の分布状況と、その立地条件を把握し、さらにそこでどのような規模や性格を帶びた集落形成がなされたかについて述べてみたい。それらを相互に関連する集落群の動態として捉えることで、沼田周辺地域での弥生社会形成の輪郭が浮かび上がってくるだろう、と考えている。

これまでに知られている弥生時代の集落遺跡の位置を図8に示した。一見沼田台地を中心とする周縁部に点在する分布状況に見えるが、空白となっている台地中央部は沼田城下の開発以来、市街地化が早くから進んだため、遺跡の存否が明確でないという条件が付く。

ここでは同一の地理的環境のなかで分布のまとまりをみせる小地域を設定し、A～Hの8地域に細分した。以下、各地域毎の遺跡分布の特徴について述べ、そのなかで各地域での代表的、かつ当地域での弥生社会形成に重要な位置を占める集落遺跡を取り上げて詳述する。

A 地域

分布域の北西端にあたり、赤谷川と利根川の合流点付



図7 沼田周辺の地形 (1/500,000) (アミ部は沖積地分布域)

近で形成された、通称「名胡桃平」と呼ばれる右岸段丘上に立地する。月夜野町大原遺跡、同町三後沢遺跡などの小規模集落が段丘に沿って連なるように分布する。これは上越新幹線やバイパス道路に沿って調査されたためだが、地形的には深く刻まれた幾筋もの沢によって段丘が分断されており、大規模な遺跡が形成されるだけの広い平坦地や微高地が存在しないことが大きな要因でもある。更に周辺における水田可耕地が、未発達で面積の小規模な谷地に限られることも影響していると考えられる。30mほどの比高を測る段丘下には、利根川と赤谷川の堆積物による沖積低地が流路に沿って見られるが、現状で弥生集落の存在は確認されていない。河川氾濫の危険性を避けたと考えられよう。なお、赤谷川の北方対岸には月夜野町藪田遺跡が2km弱離れて存在し、判明する後期の集落遺跡としては本地域のなかで最北西端に位置する。地域を分けて単独で扱うことも可能だが、立地条件や集落内容が近似するのでA地域に含めた。

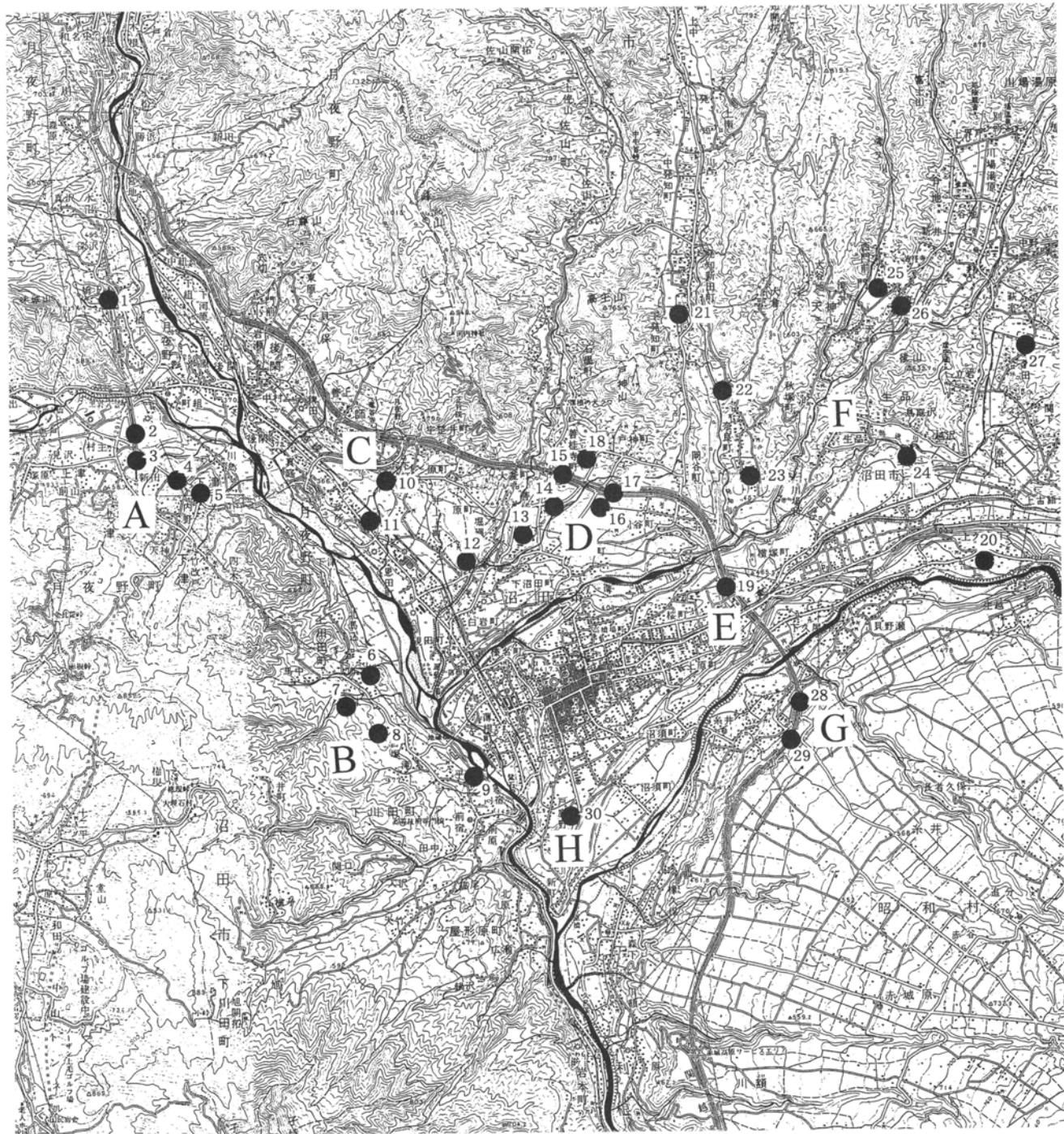
三後沢遺跡は、北から南東に並ぶ集落のうち、中央に位置する（図9）。南北を深い沢によって分断された幅200～300mの台地上に位置し、住居は北西端の最も高位な場所に立地している。国道17号バイパス線の発掘調査では、7棟の住居跡が検出されている。後に月夜野町教育委員会によって北側隣接地が調査され、住居分布がさらに北東側にひろがることが確認された（三宅 1993）。台地中央付近は浅い窪地状になっていて、弥生時代遺構は検出されていない。また、町教育委員会によって、住居検出地点から南方約150m地点も調査されたが、弥生時代の痕跡は確認されていない。このことから、三後沢集落は南北約150m、東西100m弱ほどの範囲に居住分布をもつと考えられる。この居住範囲と住居の密集度から全体での住居棟数は多くても30棟ほどと推測する。出土土器の時期は1期に遡りうるものと含めて、2～3古期が主体である。住居同士が2m以内に接近する例が見られ、屋根構造が重複してしまうと考えられることから、2～3段階の住居群配置の変遷が想定される。だとすれば、1時期の住居棟数は10棟強ということになろうか。集落景観としては、北側に急崖が迫っており、各住居の出入り口が全て南側に向いていることから、道や広場、水田や畠などの生産域は、居住域の南側から南西部に想定できよう。特に、遺跡南西部で侵食の少ない小規模な谷状沖積地が延びており、これを水田に利用したと考えられる。

三後沢遺跡の谷を隔てた北側台地には十二原II遺跡・十二原遺跡、さらにその北側の谷対岸には大原遺跡が知られる。南東には、谷を隔てて諏訪遺跡が存在する。十二原II遺跡と大原遺跡では、三後沢遺跡にやや遅れて3期から集落形成が始まっており、同時存在したことが明らかである。ただし、十二原II遺跡では一時断絶して4

期に再び居住域として利用されたらしい。大原遺跡でも、遺構外出土で5期に下る土器がみられることから、この時期まで存在した可能性はある。なお諏訪遺跡は、3期新の住居1棟が検出されたのみで、集落規模や存続期間が不分明だが、三後沢出土土器の新しい段階に相当する時期であることから、三後沢集落の分村と捉えることができようか。十二原遺跡ではV-1期（後期初頭）の住居跡1棟が検出され、さらにその近辺からV-2期（後期前半）の壺が出土している。V-3期に属する十二原II遺跡や三後沢遺跡は、それぞれ150m、300mほど東方に離れる位置関係にある。「名胡桃平」上の弥生集落のなかでは最古段階に相当し、小規模ながらA地域における弥生集落の先駆といえる。土器の時間的継続性や地理的位置関係から、これは三後沢集落や大原・十二原II集落の母胎となった可能性は高い。それが、本稿の編年で2期にあたる時期から、分断された各台地平坦部に小規模な住居群として分散し、地点を変更する程度の移動や分離などの変遷を経て、古墳時代前期に相当する4～5期段階まで継続した、と想定したい。個々の集落は相互に250～300mと離れていて、日常生活は独自で営まれたとしても、これらがA地域の社会を構成する集団としてひとつのまとまりをもつと想定することは許されよう。三後沢遺跡が多くても10棟程度で構成される集落だと前述したが、住居分布や地理環境から、大原遺跡や十二原II遺跡でも、ほぼ同程度と考えていい。最終段階まで拠点といえるような大集落が形成されなかつたのは、水田や畠の可耕地が小規模なため、食糧生産力に限界があったためだ、と解釈しておきたい。

B 地域

分布域の南西部は、利根川右岸に沿った山麓の末端にあたり、約3kmの長さにわたって右岸に沿った分布状況を示す。利根川右岸ということではA地域と同じだが、その中間は約3kmにわたる山麓地形によって分断されている。B地域の弥生集落は、上川田から下川田にかけて山麓からの小河川や豊富な湧水によって形成された小規模な谷地の周縁に分布する。広い平坦面が少ないためか、A地域と同じく小規模な集落が点在する様相を示す。相互間の距離は500m～1kmで、未発見の遺跡の存在を想定すれば、集落同士は指呼の間に隣接する状態と考えてい。下川田平井遺跡は、B地域南端に位置する集落で、利根川と片品川の合流点を南東方向に望む高位地点に住居群が営まれる（図10）。幅50mに満たない狭い尾根上で14棟が密集して検出されており、住居跡同士の重複も見られる。住居跡出土土器の時期は3期古～4期までは確實に存在し、5期相当の住居跡1棟がやや離れて存在する。東側は足下に地割れを生ずる崖、南東は急斜面、南西には尾根に沿った埋没谷の沖積地が延びる。住居群が尾根上で更に北西方向に分布していたことは確かで、市



A	C	E	G
1 蔽田遺跡	10 沢口遺跡	19 鎌倉遺跡	28 糸井宮前遺跡
2 大原遺跡	11 観音堂遺跡	20 上久屋橋場遺跡	29 中棚遺跡
3 十二原遺跡	12 諏訪原遺跡	F	H
4 三後沢遺跡	D	21 上光寺遺跡	30 日影平遺跡
5 諏訪遺跡	13 向田遺跡	22 奈良原遺跡	
B	14 町田小沢・同II遺跡	23 奈良田向遺跡	
6 上川田下原遺跡	15 石墨遺跡	24 高野原遺跡	
7 赤坂遺跡	16 戸神諏訪III遺跡	25 門前橋詰遺跡	
8 背戸田II遺跡	17 戸神諏訪遺跡	26 門前舛海戸遺跡	
9 下川田平井遺跡	18 戸神吉田遺跡	27 寺谷遺跡	

図8 遺跡分布と地域区分 (1/100,000)

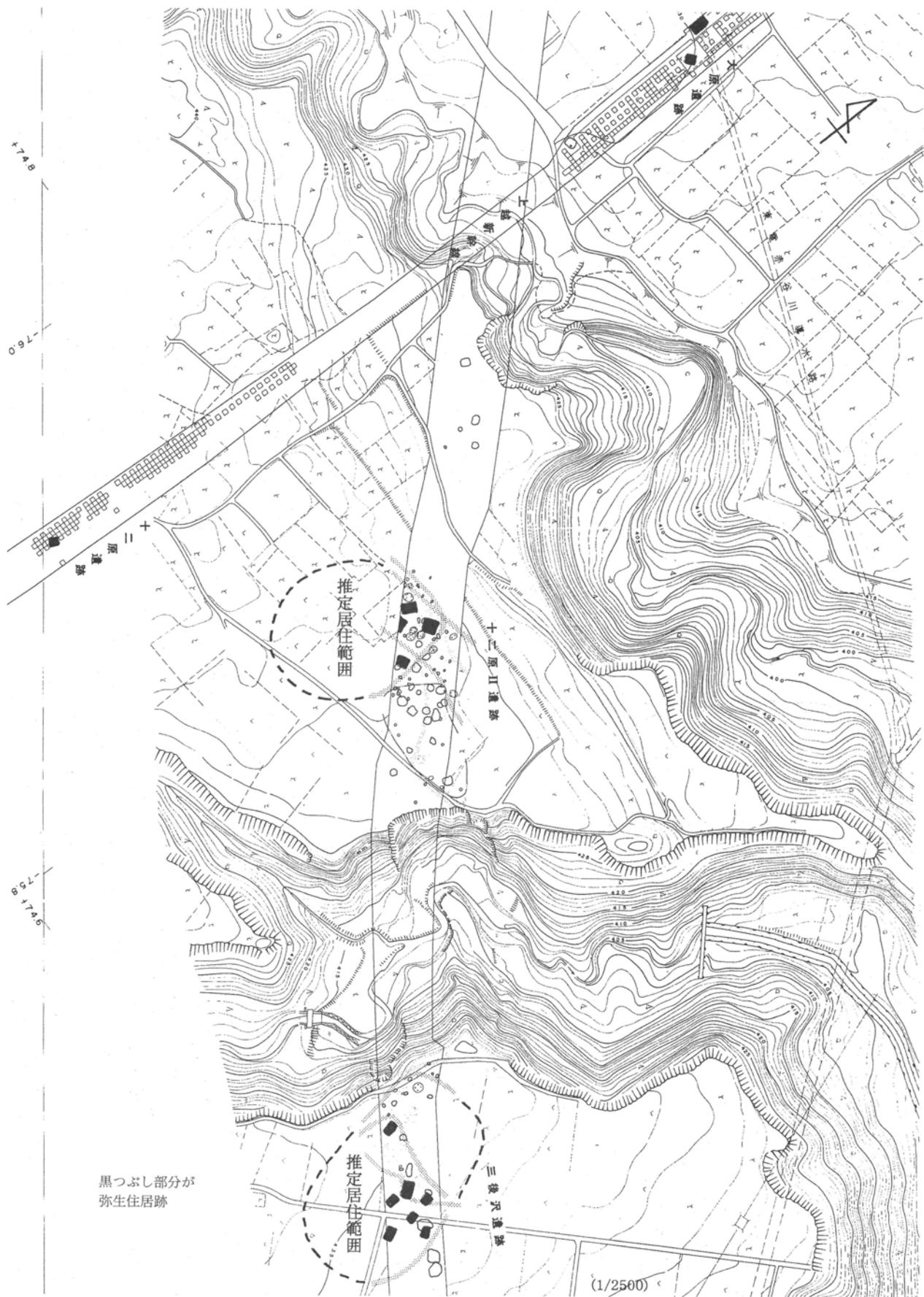


図9 A地域の集落分布（報告書より転載）

分布調査による土器分布範囲（沼田市教委 1989）を参考に居住域の範囲を推測すれば、約200mの長さに及ぶ。調査区と同一密度で住居が分布したとすれば、全体で30~40棟ほど、一時期の棟数が10棟前後と想定できよう。また、南西の埋没谷をはさんだ対岸には、幅100mほどの丘陵面があり、ここでも弥生土器の分布が知られることから、集落の存在を想定してもいいだろう。水田可耕地は、南から西側に幾筋か延びる谷状沖積地が有力だが、居住域南東斜面下の谷地部で6世紀代の水田面が確認されたものの、それ以前については検出されなかった。谷部の土層断面から、弥生時代には沖積土の堆積が十分進んでいなかった様子がうかがえる。谷を全面的に対象としたのではなく、斜度の強い部分や沖積土の不十分な場所をのぞいて水田化されたのではないだろうか。他の地域と比べて水田可耕地はけっして恵まれているとはいせず、そこからの収穫量には限界があったろう。居住地以外の高燥地については、打製石鋤が出土していることからも、畠の存在は十分考えられる。また下川田平井集落の立地が、農耕集落としてはけっして好適と思えない危険な崖縁の尾根上に存在することについては、別の側面を考慮する必要がある。その位置が、沼田地域周辺の弥生集落群のなかでも最南端にあり、利根川下流方面を見晴らす眺望に優れていること、利根川対岸のH地域で、沼田台地南端の拠点的要地にある環濠集落の日影平遺跡を間近に望めることから、利根川沿いの監視あるいは防衛的な性格をも帶びていたと類推する。なお、下川田平井遺跡の出土土器には、渋川地域に見られる口縁に刻みを施す壺が混在する。渋川地域との関係が友好的か否かはともかく、交流の結節点であり、沼田周辺地域における南の「玄関」的役割も併せ持っていたと捉えておきたい。B地域には下川田平井遺跡より以北で、背戸田II遺跡、上川田下原遺跡、赤坂遺跡などが小規模な谷の沖積地に面した台地や丘陵上に分布する。いずれも小規模集落ながら、編年では2期~4期に含まれ、一部で5期段階のものもみられることから、下川田平井遺跡とほぼ併行して存在したことがわかる。赤坂遺跡は沢沿いの奥まった斜面に立地する、極めて小さな集落である。調査区では住居跡2棟が検出されており、3期新~4期に位置づけられる。B地域内で先行して営まれた集落からの分村と考えていいのではないだろうか。なお、9号住からは北陸系の赤彩台付き壺が出土しており、月影式以後に散見する北陸地方との交流が、このような分布域の奥まった小集落にまで及んだことを示す好例である。同様の例は、後述するD地域の町田小沢遺跡でも見られるが、これらをもって北陸地域との直接的な交流を想定するのは早計である。沼田周辺地域では、3期以降に北・中信地方の箱清水式土器がもたらされ、また壺の垂下文に見られるように、その影響を強く受けているのは間違いない。

い。北陸地方の土器や情報が伝播したとしても、実態としては北・中信地方を介した間接的なものであったと理解したい。

C地域

利根川の左岸、沼田市北部の山麓南西部に形成された中位の段丘にあたる。段丘面は利根川に沿って、幅400~500mで約4kmの長さにわたって南東に延びる。中央には旧河道と思われる埋没谷状の沖積地があり、良好な水田可耕地になりえたと考えられる。北東山麓から下る小河川や山麓裾の湧水をうまくコントロールできれば、後述するD地域に匹敵する広範な水田経営が可能だったと推測される。沖積地の右岸には月夜野町観音堂遺跡、左岸には同町沢口遺跡が立地している。この沖積地は南東端で南流してきた四釜川の谷と合流するが、その地点に臨む段丘端には諏訪原遺跡が知られる。観音堂遺跡は環濠を伴う後期集落で、住居同士が著しく重複しながら35棟が検出されたという（三宅 1991）。公表された図によれば溝と住居との重複も見られることから、数時期にわたる集落変遷を重ねていたことが推測される。本報告未刊のため、詳細については後日に期待するところが大きいが、恵まれた水田可耕地を擁する地域として、さらに未知見の弥生集落の存在が予測されるなかで、そ



図10 下川田平井遺跡周辺の地形 (1/5,000) (黒書部は住居跡)

の拠点的な位置づけが与えられる内容をもつのではないかと想定している。諏訪原遺跡も、狭い範囲に住居跡8棟が高密度で検出されており、立地する地形規模から本来は30棟クラスの集落だったと推測する。これも本報告が未刊のため詳細は不明であるが、沼田市史に公表された資料によれば少なくとも3期古から5期までの時間幅は見込めるようだ（秋池 1995）。沖積谷の合流地点に臨み、広い水田可耕地に面することから水田経営には絶好の地理的環境にあったといえる。諏訪原遺跡の東側を流れる四釜川の対岸上には、後述のD地域に属する弥生集落が数箇所知られている。両者は四釜川に地形を分断されるとはいえ、分布上はひとつのまとまりを持つ集落群として捉えることも可能だ。

D 地域

薄根川右岸の段丘上で、美麗な円錐形の戸神山（標高760m）に北側を遮られ、東西をそれぞれ発知川と四釜川に画された南向き緩斜面にあたる。南側は薄根川の段丘崖で画され、最下位の段丘面には近代以降でも洪水被害のあった沖積低地が見られる。戸神山南麓には、小沢川が山裾に沿って北東から西方向に流れしており、ここに幅300～400mの沖積地が形成されている。さらに戸神山麓を下る小河川によって形成された小規模な沖積谷がこれに加わり、沼田地域のなかでは比較的広域な水田可耕地となっている。弥生集落はこれらの沖積地に面する微高地に分布しており、現段階では最も高い密度で弥生集落が分布する地域だ（図11）。戸神山南麓から広がる沖積地の内には、さらに埋没谷状の窪地が幾筋か存在しており、実際に水田として利用された面積は限られていたかもしれない。しかし、緩傾斜地形で沖積作用が進んでいたこと、小沢川や山麓湧水からの灌漑用水確保が容易と考えられること、さらに、東西2km、南北1kmと沼田地域ではもっとも広い面積の平坦地を有する地形的優位性が、弥生時代の中核的集落の形成に大きく寄与したと考えられる。ほぼ中央部に位置する戸神諏訪遺跡（戸神諏訪III遺跡も含む）は、直径約300mの範囲で居住域が展開する沼田地域唯一の弥生集落である（図12）。ここでやや詳しくその形成過程や変遷についてふれてみたい。出土土器を見る限り、開村の時期は2期に相当し、断絶することなく、最終段階の6期（布留式新段階併行）まで継続する。3期古段階での住居跡は10棟前後が確認できる。調査区北側にも居住域が延びており、その本来の面積は約2倍程度と想定されるから、全体では20棟前後で構成されていたと思われる。隣接する住居同士の間隔は、25m～50mと非常に広く、南西から北東にのびる馬の背状の小高い位置を占めて、居住域に幅広く散在する状況を示す。続く3期新には大型住居（戸神諏訪11号住、戸神諏訪III69号住の2棟）が出現するが、分布状況に大差はない。個々の住居跡をみれば、隣接宅地に建て替えたり、

拡充、あるいは分棟を行っていることがわかる。後続の4期についても同様で、分布傾向や住居数に大きな変化は見られない。住居数の漸増と、分布の高密度化が窺われるが、それでも住居間距離は10m前後と離れている。集落構造の大きな変化は5期以降に訪れる。まず、居住域が中央部の窪地をめぐるように、大きく拡大する。それとともに、住居棟数がそれまでの倍ほどに増大する。その内実は小規模な住居の急増である。住居密度もそれまでに比べて格段に高くなることが明らかだ。戸神諏訪遺跡で検出された住居総数は94棟を数えるが、時期の判明するものだけでも半数ほどが5期以降に属する。人口の自然増と理解するには、あまりに急激な変化なので、その背景には他集落からの人口流入があったと想定せざるを得ない。それも一部構成員の転入程度ではなく、小規模な集落ごと移住してきたと考えてもおかしくないほどの急増ぶりである。そうだとすれば、どのような集落が、何処から、何故この地を選んで合流したのかという問題を解明する必要がある。それについては、全地域の集落動態を俯瞰したうえで、後述するつもりである。また、個々の住居跡についてみれば、正方形プランが主流を占め、主軸方向がそれまでの西に振れるものから、南北方向に揃える傾向が強くなるのが特徴だ。ただし住居形態や主軸方向の転換は、その配置プランや、さらには宅地や集落構成員の共有空間、付属施設などを含めた集落構造全体の改変と関わる可能性についても考慮しておく必要があるように思う。なお墓域については、居住域の南東に窪地を挟んだ対岸で約120m離れて位置しており3期新の円形周溝墓1基と主体部構造を同じくする木棺土壙墓1～2基が検出されている（図13下）。戸神諏訪遺跡は、以上に見たように、長期にわたって継続する集落であること、北側未調査部分を含めれば、全期を通じて200棟に及ぶ住居棟数が見込めること、さらに弥生集落分布の中央にあって、広い水田可耕地と居住可能な平坦地を擁する場所に位置すること等から、沼田地域の弥生集落のなかで中核的な存在であったことは間違いないだろう。また土器の様相でみれば、5期以降になっても在地弥生系が残り、すでに利根川上流へと北上を始めていたはずのS字甕が、ついに最後まで主流の座をしめていない点に注意しておきたい。

戸神諏訪遺跡の西側を流れる小沢川（幅約100m）の対岸台地上には、これと同様に3期古から6期まで長期継続する石墨遺跡がある。幅350mほどの台地上で、最も高位の西端に居住域を設け、200mほどの間隔を空けた東端には、円形周溝墓群と土壙墓からなる墓域が設けられる（図12）。検出された住居跡は25棟で、さらに南北方向に分布の広がりをみせる。ここでも5期以降が半数近くを占めることから、戸神諏訪遺跡と同一歩調で拡大していったと解釈したい。なお同一台地上には、東方250m地

点で戸神吉田遺跡、南方350m地点には町田小沢・町田小沢II遺跡が存在する(図12)。両者とも小沢川右岸に位置する小規模集落で、距離的に見ても石墨集落ないし戸神諏訪集落と一連の集落群を構成したと考えて差し支えなかろう。戸神吉田遺跡は調査範囲が狭く3棟の住居跡しか検出されなかったが、出土土器は2期に相当するものから4期段階まで見られ、比較的長期にわたって集落が営まれたことを推測させる。ただし、戸神諏訪遺跡や石墨遺跡のように、間断なく継続したというより、調査地点においては断続的な居住域として利用されたとの理解をしておきたい。注目されるのは9号住出土土器にみられる古相の台付甕で、2期ないしは1期の新しい段階まで遡るとみていい。このことは、戸神吉田集落の開始が石墨遺跡や戸神諏訪遺跡とほぼ同時期か、あるいはそれに先行する可能性を示唆するものであり、母村の拡大に伴って分離した後出的集落という解釈はできないと考える。町田小沢遺跡(以後、同II遺跡も含める)は台地の南端にあって、小沢川河岸の小規模な沖積地に臨む狭小

な緩斜面に立地する。主に3期新に相当する短期間の存在で、石墨集落や戸神諏訪集落の分村的性格を想定したい。なお、1号住からはそのまま遺棄された状態の一括土器が大量に出土しており、甕のなかからは約0.45リットルの炭化米、また箱清水式系と月影式相当の甕が共伴することが特筆される。また住居群と小沢川右岸の斜面を画するように、1条の溝が検出されているが、その性格が環濠か条溝かは確認されていない。

向田遺跡は、町田小沢遺跡からさらに700mほど南西に離れて、幅の狭まつた台地南端の中央に位置する(図11)。ここでは検出された21棟の住居跡のうち、1~2期の住居1棟を除いて、他は全て5・6期に属する。この空白期間の長さから、5・6期の集落はそれ以前との関わりはなく、新たに形成された新出集落と解したい。これから考えられることは、向田集落が戸神諏訪集落や石墨集落からの分村、あるいは他地域からの移転集落であった可能性だろう。住居の形態については、正方形プランながら柱穴間に棒状礫を据えた炉を設ける構造から、在地

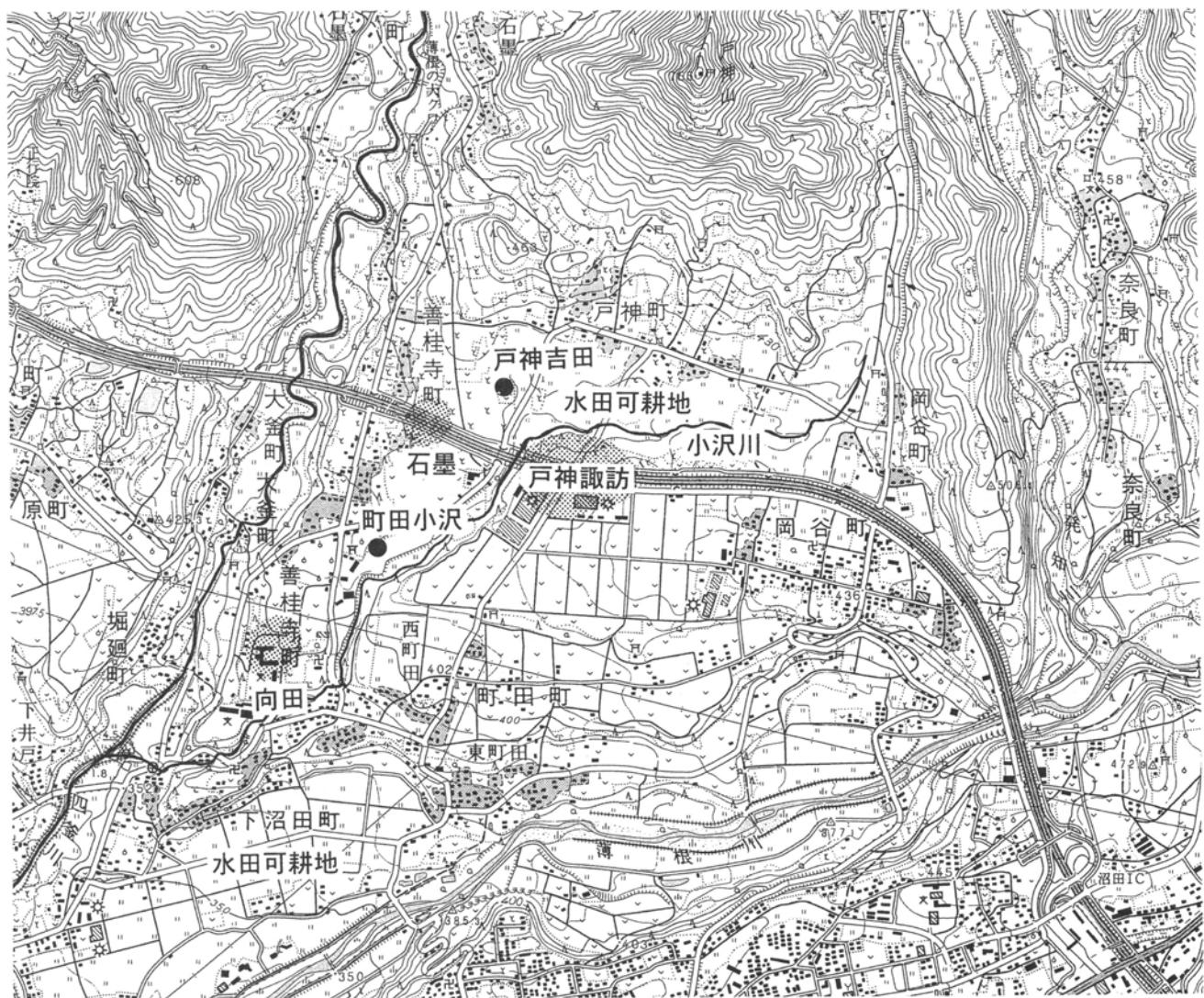


図11 D地域の集落分布(1/25,000 「沼田」「後閑」)

弥生集団の伝統を引いた可能性は高い。異質な点をあげるならば、S字甕が多く見られる点だが、限られた公表資料のみによる印象だけなので、土器様相については多くを語れないのが現状だ。この向田遺跡の南側は小沢川の谷を隔てて薄根川の氾濫原と思われる広域な沖積地が広がる。その規模は南北400m、東西に約1.5kmに達し、用水路の整備という条件が実現されれば広大な水田経営が可能な場所といえる。向田遺跡の位置から想定すれば、小沢川流域の狭小な谷底低地よりも、むしろ眼下に開けるこの広い沖積地の水田開発を目途としたのではないかと類推する。このことは、水田経営という側面についても、D地域が沼田地域における中核的な存在であったことを示しているのではないだろうか。

E 地域

沼田台地の東部、薄根川と片品川に挟まれた上位段丘面にあたる。弥生集落としては鎌倉遺跡が知られる。地形はほぼ平坦で、北寄りに小河川（滝取川）とその旧河道とおもわれる小規模な埋没谷が西流し、現状で推測できる唯一の水田可耕地となっている。鎌倉遺跡は、この沖積地の北側に位置しており、調査面積は小規模であったが、住居跡は比較的密な分布を示す。谷部の試掘調査では沖積土の堆積が不十分で、流入礫層が見られることから、弥生時代に水田として利用された可能性は少ないとの所見が報告されている（大江 1989）。北側の崖下30mに広がる薄根川氾濫原は現在水田化されているが、近代まで洪水被害を被ることが度々あったとのことで、弥生時代の水田域とは考えにくい。沼田台地の中央部、沼田城がある現市街地域はほとんど発掘調査が行われていないため、弥生集落の存否の確認はできないが、水田可耕地となりうる窪地や谷が限られるため、その分布は非常に稀薄だったと推測する。むしろ、地形や分布調査の結果（沼田市教委 1989）などを参考にすれば、小河川による沖積地が残る、東方の横塚町や上久屋町方面に弥生集落の分布が予想される。上久屋橋場遺跡はそのうちの一集落と思われ、鎌倉遺跡から東方約3km離れた片品川右岸の中位段丘に位置する。鎌倉遺跡と上久屋橋場遺跡は、いずれも小規模な集落と考えられ、前者は2～3期古、後者は3期古～4期と、やや存在時期にずれを見せており、集落全容が判明しているわけではないので、先後の時期存在した可能性を残すが、遺構外出土土器を見ても新しい段階が稀薄であり、鎌倉遺跡は沼田周辺地域のなかでも、古くに集落を形成した後、比較的早い段階で別の場所へ移転した可能性を考えておきたい。

F 地域

分布地域の北東部を占め、北側山稜部を流下する発知川、薄根川、田沢川などの比較的広い開析谷が発達する地域である。弥生集落は谷底低地に面した微高地や小規模扇状地等に立地していて、全般的に小規模で点在する

様相を示す（図14）。隣接する谷同士は、山麓（標高60m前後）が張り出して両者間を遮っており、集落相互は視認できない。直接山を越えるか、河川に沿って回り込むかをしないと、隣接谷の集落との交流はできない。日常的な生活や、農作業はそれぞれの谷間を単位として行われ、集落領域もこの範囲内に限られていたろう。それぞれの河川流域毎に小集落群としてのまとまりを持つと考えておく。戸神山の東側を南流する発知川沿いの谷底低地では、上光寺遺跡、奈良原遺跡、奈良田向遺跡が、その東側に展開する薄根川沿いの沖積谷には門前橋詰遺跡、門前外海戸遺跡が知られていて、それぞれが小群を構成していたと捉えられる。なお、北東の最奥部に位置する田沢川上流域に形成された開析谷は、F地域で最も広い沖積面をもつ。その東側扇状地面に、IV期（中期後半）の住居跡が検出された白沢村寺谷遺跡が知られる。V期（後期）の住居も存在するが、公表された出土土器による限り、断続的な小規模集落で、長期継続集落ではないらしい。沼田周辺地域の農耕集落としては、最も早く進出したフロンティアの集落として捉えたい。またその対岸には、川原町口式と考えられる壺が出土した、と伝えられる川場村の立岩地点があり、この沖積地が水田可耕地として早くから注目されていたことをうかがわせる。田沢川の中流付近には高野原遺跡が知られており、12棟の住居跡が検出された（図15）。小規模集落ながら2期には形成されて、3期新、5期と断続的な住居の存在が確認できる。集落全体では継続したことも予想されるが、途中で断続的に居住地点を移した可能性も考えておこう。また土坑や遺構外から1期に遡る壺と甕が出土していることから、V期（後期）以降に広範な分布を見せる遺跡のなかでは、最も早くに形成された集落のひとつと理解される。居住域の立地する田沢川左岸は平坦な段丘面で、水田可耕地は眼下の田沢川両岸に残された低地を想定したい。これは集落立地面とは20mの比高があり、小沢川は浸食崖を形成してさらに10m下位を流れる。河川氾濫の脅威は比較的少なく、上流からの取水や、段丘下からの湧水によって、安定した水田経営が可能な場所と考える。F地域の弥生集落は立地地形の狭小さと住居分布の密度から、いずれも高野原遺跡と同程度の小規模なものであり、水田可耕地等の地理的条件も近似した場所に選地している。集落の継続期間は、本稿の編年区分で2～3時期にわたり、4期で断絶する様子がうかがわれる。また、集落間での時期的なずれも看取され、これを積極的に評価するならば、流域内での集落の移動あるいは小規模な分村が行われた、と捉えられるのではないか。なお、発知川流域では上光寺遺跡、薄根川流域では門前橋詰遺跡と門前外海戸遺跡が最奥部の集落として判明しているが、これより上流域にあたる標高500m以上の地域には極めて稀薄な分布しか知られていない。沖積地

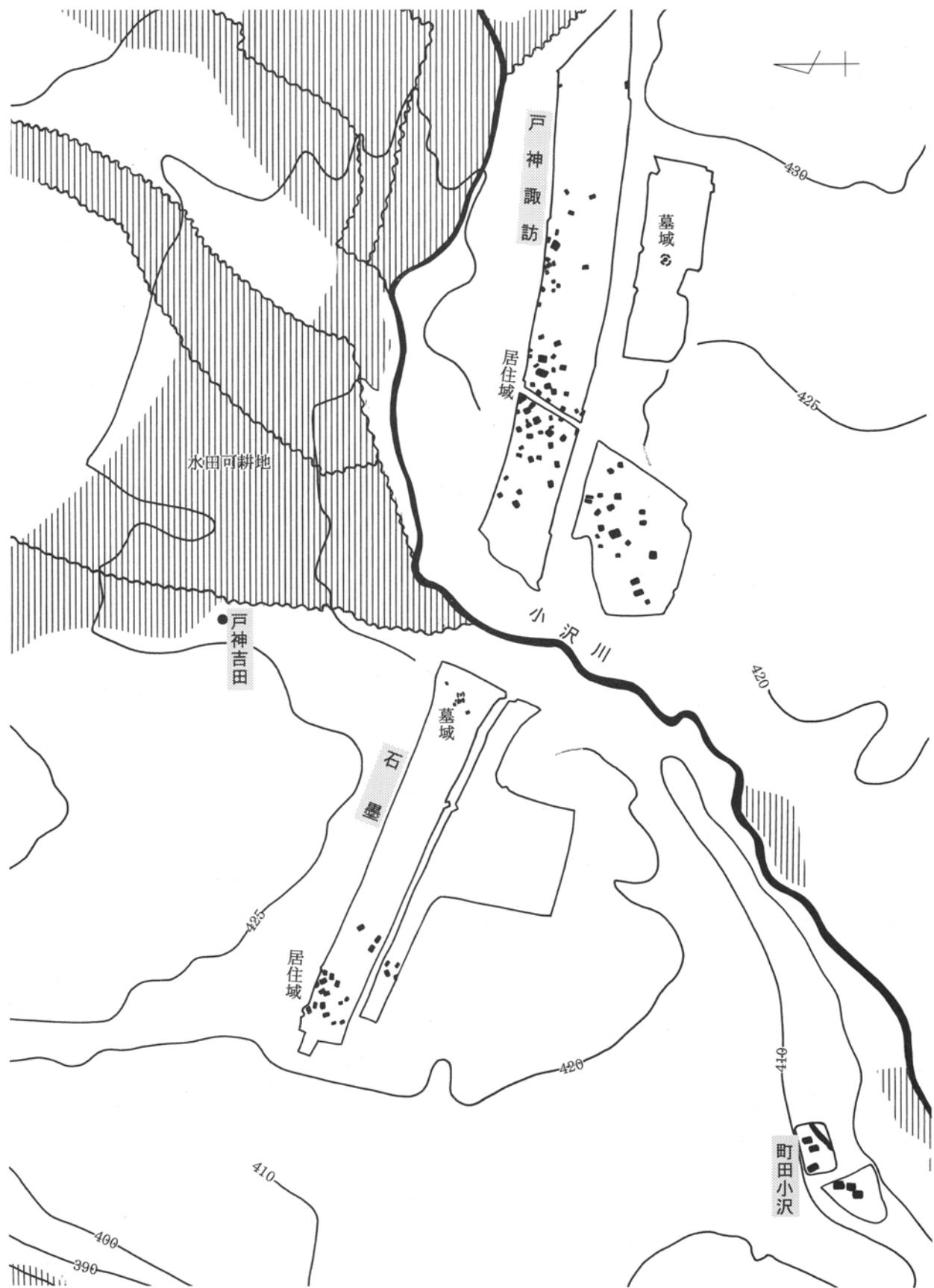
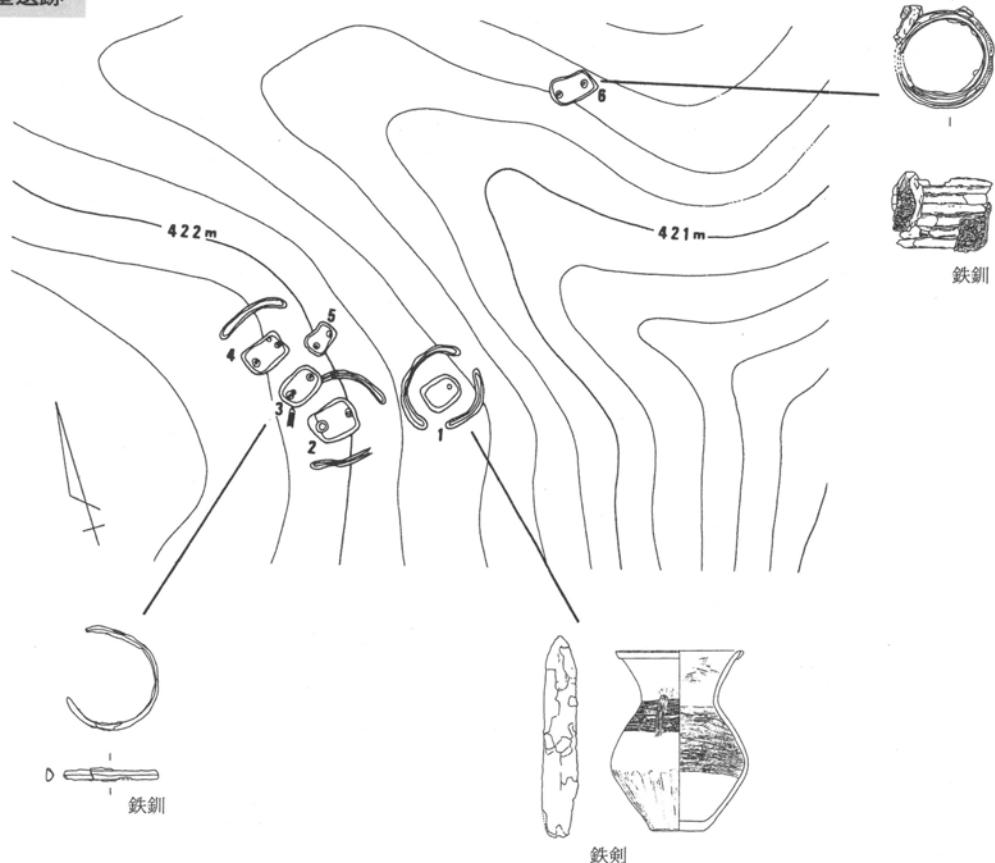


図12 戸神諏訪を中心とした集落分布 (1/5,000)

石墨遺跡



戸神諏訪遺跡

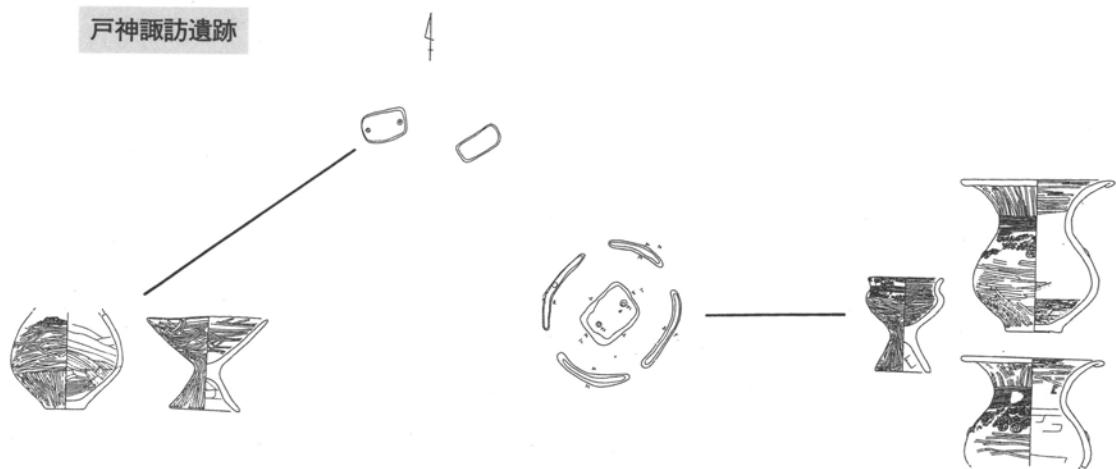


図13 石墨・戸神諏訪遺跡の墓群

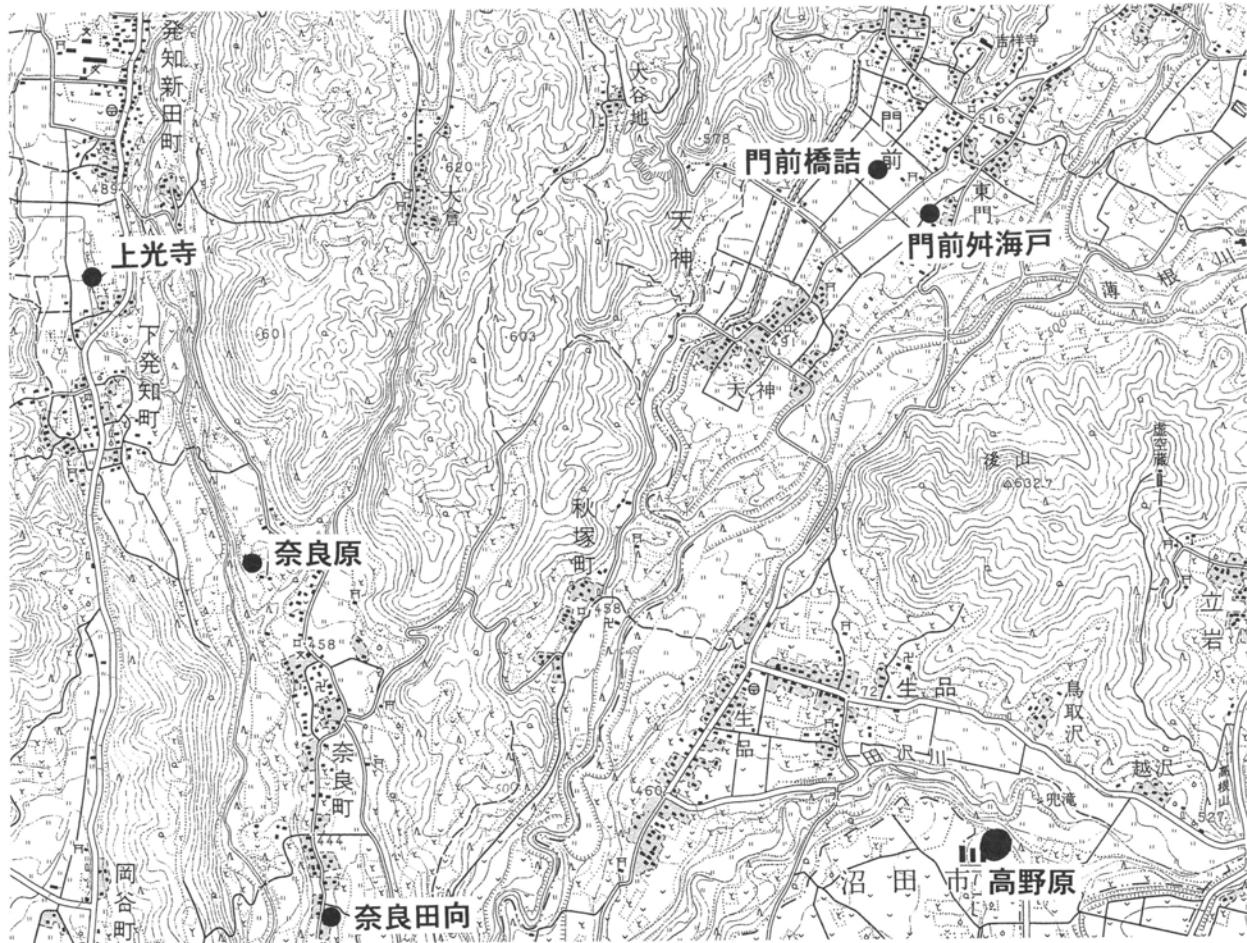


図14 F地域の集落分布 (1/25,000 「後閑」)

が存在しても、傾斜が強くて堆積が不十分であったり、また水温の低いことも水稻の生長に不適であったのではなかろうか⁷⁾。自由に選地できる環境であれば、やはり住みやすく水田経営に好適な地を選ぶだろう。その結果が、このような弥生集落の分布状況に反映されていると理解しておきたい。

G地域

片品川左岸に発達した段丘面にあたり、集落としては糸井宮前遺跡、中棚遺跡が知られる。沼田台地周辺における分布域全体の中では、南東辺部に相当しており、片品川によって沼田台地と画される。糸井宮前は中段、中棚遺跡は上段と、比較的高位な場所に立地する。段丘面は深い沢によって分断され、下位段丘面ではその沢の水を集めた用水によって水田が営まれている。遺跡の立地する中・上位段丘面では、高燥な平坦面が広がり、水田経営はほとんど不可能といつていい。下位段丘面に残された谷状の小規模な冲積地が水田可耕地と考えられるが、面積としては沼田台地のC地域・D地域ほど広域ではない。下位段丘の微高地にも、土器の分布が知られることから集落が存在したことは十分予想される。その場合、糸井宮前遺跡と中棚遺跡が、あえて50m以上も高い

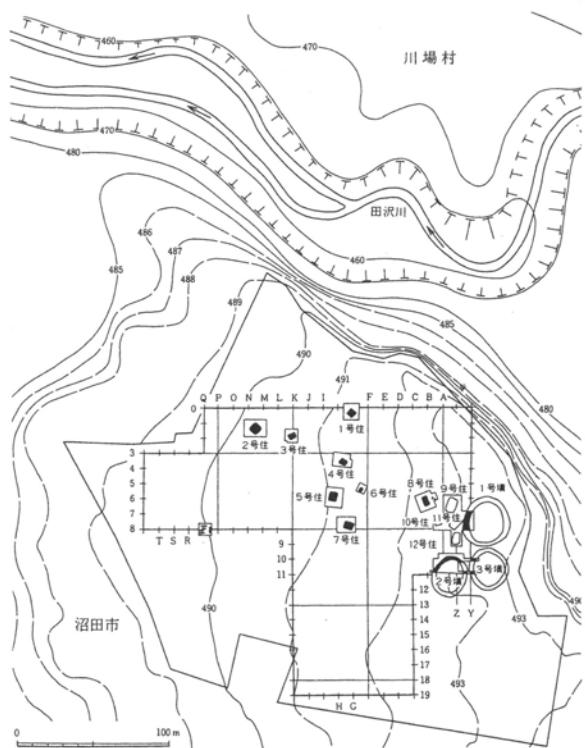


図15 高野原遺跡住居分布 (報告書より転載)

段丘崖の上位に形成された意味についてあらためて考えてみたい。この中・上位段丘面は、片品川の谷を挟んだ西岸に、ほぼ同標高の沼田台地を見晴らすことができる。ちなみに、沼田台地南端の日影平遺跡は西方に3km強と離れているが、眺望が良く双方に視認できる位置にある。上位段丘の崖上には戦国期の出城が築かれたことも知られている。以上の立地条件を考慮にいれれば、これまで見てきた水田可耕地の至近に立地する他の弥生集落とは異なり、これらは水田経営よりもむしろ眺望を優先的に考えた立地である、と理解したい。といえども、全く隔絶した高所にあるわけでもなく、下位段丘での水田経営も可能だ。その点、防御的色彩の強い「高地性集落」との性格を与えるのは早計だろう。実際、遺跡には柵や濠のような防御的施設は見られない。糸井宮前遺跡では、35棟の住居跡が検出されており、そのうち1棟は3期古に属するが、他は全て5期以降に位置づけられる。遺構外でも3・4期の土器が認められないことから、5期以降の古墳時代前期に入ってから、新たに形成された集落と考えていい。ところで、糸井宮前遺跡出土の土器をみると、樽式系土器を主体とする一群と、S字甕と外来系土師器を主体とする一群に大きく二分されることが判明している（関根 1985）。本稿の編年では5・6期に相当しており、集落としては時間的に継続することが明らかである。ところが、S字甕を多く出土する住居跡とそれ以外とを分けて、住居分布を検討した結果、樽式系住居（主に5期に相当）は段丘縁辺にそって平行に、後続する6期のS字甕主体の住居跡は直交方向に分布する事が判った（図16）。集落の変遷過程のなかで住居配置が変わることは、樽式土器の集落でも見られることから、過大評価は避けるべきだが、これが土器の大きな転換期と軌を一にしている点を重視したい。糸井宮前遺跡にみる5期から6期への変化は、樽式系土器の払拭とそれに替わる外来系土師器への全面的転換という現象で理解される。それは言いかえれば、南方から進出してきた古墳文化への同化を意味し、さらに視野を広げれば、群馬県南東部を中心に既に形成されていたと思われる古墳社会⁸⁾への参画、あるいは同調といった意味合いをも想定することができる。そうだとすれば、糸井宮前遺跡にみられる集落構造の変化は、単なる宅地移動の結果という範囲を超えて、道や広場、共同祭祀場、畠等も含めた新たな集落形成を目指した構造変革だった、という理解もあるがち空想とばかりはいいきれないだろう。後述するように、S字甕を主体的に出土する集落は、非常に限られており、しかもその立地は、伝統的な在地弥生集団の領域とは異なっている。その意味で、在地弥生集落の稀薄だったG地域のなかで、しかも沼田台地への眺望に優れた高位に進出することの背景には、平野部で古墳文化を築きつつあった集団の北上によって、沼田周辺地域の弥生社

会との間に引き起こされたであろう緊張関係が見え隠れするのである。

H地域

沼田台地の最南端部で、利根川と片品川の合流地点を臨む地点にあたる。弥生集落としては後期の環濠集落である日影平遺跡が知られる。そのさらに南方の段丘下平坦面にもいくつかの遺跡の存在が判明しているが、居住用地としては日影平遺跡のある台地上が最も広い面積を占めている。台地の東側は段丘崖となっており、その東側には片品川の右岸段丘面が形成されている。この段丘面は南方に緩く傾斜しており、崖下からの湧水や旧河道によって形成されたと考えられる小規模な窪地が点在するか、幾筋かの小規模な谷状の窪地が南北方向に延びる。台地寄りの微高地には弥生後期の土器が採集されるので、小規模な集落の存在が想定される。水田可耕地は、台地上では利根農林高校の北側にわずかに見られるだけで、むしろ東側の下位段丘面に形成された沖積地が候補としては有力だ。ここは現在広範に水田化されているが、片品川底面標高が低く灌漑用水としては天水や段丘からの湧水に頼らざるを得ないこと、下位段丘面が平坦ではなく、微高地と小規模な谷状の窪地が連続する地形であることなどから、弥生時代には比較的小規模な水田可耕地が点在する地形だったと考えられる。日影平遺跡はB地域の下川田平井遺跡、G地域の糸井宮前遺跡と並んで、沼田周辺地域における弥生社会の「南玄関」とも言うべき地理的位置にあり、環濠集落という形態からも特殊な性格を付与できると考えている。標高は380mを越え、眺望に優れる。西方には利根川河畔とB地域の集落が形成された山麓斜面、東方には片品川河畔とその対岸に展開する段丘面が一望できる。南方は両河川の合流点をはるか下方（比高約100m）に見下ろし、遠望すれば渋川地域との地形的境界となっている峡谷部も見晴らすことができる。日影平遺跡からは30棟の住居跡が検出され、うち28棟が環濠内に位置している。さらに環濠外で住居分布の広がる可能性は否定できないが、概ね集落の全容を明らかにしたと言つていい。環濠の規模は、長径110m、短径85mの「卵」形で、群馬県内の環濠集落例のなかではやや小規模な部類に含まれるが、住居数からすればけつして見劣りするものではない（図17）。時期は3期古から3期新までに限られており、4期以降は廃絶したと考えられる。環濠は、V字断面の1/3～1/2まで埋没した段階以降に多くの土器が廃棄されている（小池 2003）。ここから3期古相当の土器が出土していることから、環濠そのものは集落形成の古い段階から存在したと考えていよい。報告者は環濠に高さ1.5mほどの土累の存在を想定しており、濠自体の深さを含めれば、最大3.5mに達する深さを有したことになる。土器廃棄が多く見られる段階で、土累の崩落と濠内1mほどの埋没があったとしても、2

黒 5期

白 6期

矢印は推定出入口

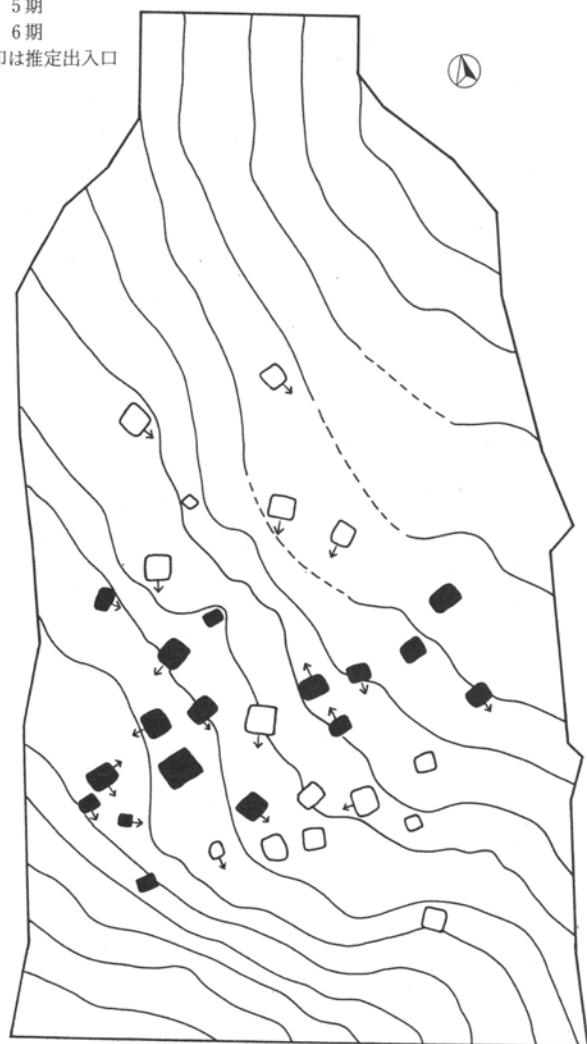


図16 糸井宮前遺跡住居分布 (1/2,000)

m近い深さは保っていたと思われ、十分に防御的機能を果たしたと考えられる。環濠の性格について、一般論としては「防獣」や「水害対策」なども考えられよう。だが、獣害を防ぐならば他の集落（特に山麓部）に見られないのはおかしいし、また洪水の起りえない地形に位置することから「水害対策」説も否定される。従って日影平遺跡の場合は、間違なく防御的施設と理解しているだろう。住居跡の出土遺物から、集落は概ね3時期に区分され、一時期あたり10棟前後で構成されていたと考えられる。環濠外の2棟はそのなかでも古段階に位置づけられ、集落形成当初から環濠の外側に構えていたことがわかる。このことは、環濠の築造時期が集落開始と同時ではなく、3期古の途中から形成された可能性も考慮する必要があることを示すものである。なお、日影平遺跡出土土器のなかに、渋川地域で多く見られた折り返し口縁に刻みを加飾する壺が混在している。B地域の下川田平井遺跡と同様に、渋川地域との交流の一端を示す例

として注目しておきたい。

以上に述べた弥生集落の分布の様相と立地傾向について総括すれば、いずれも河川流域の谷底平野や湧水あるいは小規模河川によって沖積地が形成された地点に面しており、各々の地形条件に応じた分布密度と集落規模をもつ、といえよう。基本的にはたとえ小規模であっても、洪水の危険性がなく少人数の労働力でも経営可能な水田可耕地を選択して集落が立地する傾向が強い。この事実から、弥生集落の居住地選定において、まず水田経営を最優先にしたことは明らかだ。そのことが必ずしも“水田農耕を主な生業とした集落”を意味するものではないにせよ、基本的に彼らがそのような強い指向性を持っていたことについては、「稻作偏重に過ぎる」との批判が高まっている昨今の論調をふまえてもなお、強調するのにやぶさかではない。当然のことながら、その地理的条件には可耕地や居住地の許容面積、あるいは水利の便などで優劣の差があり、またその較差も氾濫などによる河川の流路変更や、沖積作用の進行がもたらす沖積地の乾燥化等で、必ずしも不变ではないことを考慮しておく必要もある。このような弥生集落の立地傾向は、戦前の研究以来、多くの先学や論者によって語られてきた事象であり、あらためて筆者がここで指摘するまでもない。ここで論点にしたいのは、水田指向か畠作指向かといった総論的な生業傾向の把握ではなく、沼田周辺地域という独自の地理的条件や自然環境の中で、個々の集落遺跡が実態としてどのように適応し、それらがどのような関係をもって地域社会を形成していたのかという理解にある。

ここでは、前述した土器編年の細分案に従って、各地域毎に形成された集落の時期と継続期間を把握し、代表的な集落遺跡の性格やその成立背景についても言及した。最後に、沼田台地を中心とした全地域を対象にして、集落群の成立と変遷過程について総括してみる。そこに浮かび上がってくるであろう弥生社会の動態のなかにこそ、弥生びとを主人公とした地域形成史の実相が現れるはずであり、それが弥生時代から古墳時代へと大きく移りゆく歴史の流れを具体的に解明するひとつの重要な鍵になると考えている。

4. 弥生社会の形成とその変遷

(1) 沼田周辺地域における弥生社会の範囲

ここでは、先に検討した沼田周辺地域における弥生土器の地域色に基づき、その分布と弥生集落の関係を見ることにしたい。地域色は壺と甕にほぼ限定されること、時期は2～3期に目立ち、その前後の時期は不明瞭である、という条件付であるが、幸い3期に最も遺跡数が増え最大域まで分布が広がるので、分布範囲の検討には差し支えない。



図17 日影平遺跡の位置と全体図（報告書より転載）

まず、記述の煩雑さを省くために、沼田周辺地域に特徴的な地域色をもつ土器を、「沼田型壺」「沼田型甕」と仮称することとする。また先に対比した渋川市周辺の土器についても、仮に「渋川型壺」「渋川型甕」と呼称する。ただし、それぞれ様式概念として捉え得たわけではないので、あくまで便宜的な名称として用いる。特に「渋川型」については、榛名山東南麓の土器と分離する意図はないので、あらかじめ断っておく。

前項で詳述した地域分類に従って、土器の地域色の分布状況を見ることにしよう。北部を占めるA・D・E・F地域では、沼田型壺と沼田型甕が優位を占めており、特に壺はほとんどが沼田型と言っていい。甕については中間的な例も見られることから、明確な分離は難しいが、渋川型甕も一定量併存するようである。A地域の月夜野町諏訪遺跡1号住居跡では、櫛描波状文のみの沼田型甕と、頸部簾状文を施した渋川型甕が共伴している。両者には、先に地域色の特徴とした器形の差も明瞭に認められる。当初これを時期差と考えたが、多くの遺跡で両者共伴例が存在することから、沼田地域北部での一般的な在り方と考えておきたい。一方、B・H地域では、渋川型壺が混在することが特徴である。しかし、ここにみる渋川型壺は、口縁部に刻みや刺突を施す点で渋川地域の壺と共通するものの、頸部～肩部文様は沼田型が多く、いわば両者の折衷型式といえるものだ。数量的にもけっして主流を占めるわけではないことに注意する必要がある。この種の渋川型壺が、分布域南端にあたる下川田平井遺跡と日影平遺跡で明瞭に認められることについては先述した。甕については北部の状況と大差はなく、沼田型と渋川型が併存する。

以上のことから、沼田周辺地域では集落の分布域全域にわたって沼田型の壺・甕が主体を占めており、南端部の集落に限って渋川型壺、ないしはその影響が色濃く見られるといってよい。それは前項でも触れたように、渋川地域の弥生集団との交流が、南端部に位置する集落ほど活発であったことをものがたる。地理的な位置関係からすれば、これは当然のこととして捉えられる。では、一方の渋川地域ではどうなのか。南端部の日影平遺跡から、直線距離で離れること約13kmの地点にある有馬遺跡を見てみよう。なお、有馬遺跡は長期にわたる拠点集落なので、ここでは特に3期相当の土器にしづらべて対比する。それによれば有馬遺跡では、壺の大部分が渋川型で占められており、甕では渋川型を主体として一定量を沼田型が占めるようである。このことから、壺では両地域の集落分布と地域色がうまく符合するが、甕については較差が不明瞭で、全体に占める量比の違いに帰結するようだ。先述した「地域色」を「様式」として明示できない理由がここにある。だが、それがたとえ様式概念で捉えられなくとも、壺に顕現する地域色がそれぞれの集落

分布と一致することは、地理的な隔絶が異なる地域色を生み出し、それによって沼田周辺地域の集落群をひとつのまとまりを持った社会として捉えることが可能であることを意味する。このように考えた場合、日影平遺跡や下川田平井遺跡はその土器様相からみて、沼田地域弥生社会のなかにおける渋川地域との交流拠点という位置づけが与えられよう。そして、北部に展開する集落群は地域社会の主体であり、さらに継続期間や規模の大きさからその中核的位置をしめる戸神諏訪遺跡や石墨遺跡は、名実共に地域社会の中心的な拠点集落であったことが理解されるのである。では、その地域弥生社会がどのような過程で形成されたのか、そしてどのような変遷を辿ったのかについて述べることにしよう。

(2) 地域社会の動態

沼田周辺地域における弥生時代の地域社会形成は、その様相から大きく3期に分けて理解される。これを、開拓期、定着期、再編期と呼称して記述を進める。

開拓期 土器編年の1～2期に相当する段階で、地域内の北部にあたるA・D・E・F地域での集落形成が始まる。数棟から多くても10棟前後の住居から構成される小規模集落で開始し、各地域で1ヶ所程度の分散した分布状況を示す。本来の意味で当地域のフロンティアといえば、IV期（中期後半）に集落を構えた白沢村寺谷遺跡や土器棺墓が検出された昭和村川額軍原遺跡であるが、これに後続する集落遺跡が現状では確認されていない。定着することなく、移転を続けたと考えたい。ここで開拓期としたのは、集落形成がその後に引き継がれ、地域社会形成の開始期にあたるという理解による。ただし月夜野町十二原遺跡や沼田市背戸田II遺跡、同向田遺跡、同高野原遺跡のように、短期間で終了し、別の地点や地域に移転したと想定される集落も少なくない。稀薄な集落分布密度からすれば、集落選地の自由度は高く、より良好な水田可耕地や、環境に優れた居住適地があれば、地域内で転々と居を移したと推測する。A地域における十二原遺跡と三後沢遺跡、B地域における背戸田II遺跡と下川田平井遺跡あるいは上川田下原遺跡にみられる、時期的な先後関係（表1）は、短期移転の末に数期にわたる集落として定着した集落動態を示すのではないだろうか。また、この時期には母村といえるような大規模な拠点的集落は見られず、最小の集団単位による小規模集落の形で点在することは注目して良い。それは水田開発やその経営が小規模なものに留まっていた事を示す。地域を異にする集落間の紐帯の程度については、3～5kmという集落間距離から、日常生活や協業面では、各々が独立的存在であったと想定したい。ただし、この直後から土器の地域色が顕在化かつ全体化していくことを評価すれば、婚姻や情報交換、物資流通等を通じた地域全体のまとまりはすでに存在したと考えていいだろう。

ここで問題となるのは、これらの開拓期集落を形成した集団の出自である。当然ながら、IV期から存在した在地弥生集団が、そのまま継続して集落分布を広げたとの解釈も可能だが、後続するV—1・2期（後期初頭～前半）の遺跡が、十二原遺跡や高野原遺跡など限られたわずかな遺跡でしか見られないことから、人口の自然増があったにせよ、その直後に位置づけられる開拓期集落群の主体とは考えにくい。むしろこのような集落群出現の直接的要因として、他地域からの集団移住の可能性を想定してみたい。その候補としては、利根川で結ばれる渋川地域の弥生集団があげられよう。渋川地域では、有馬遺跡・有馬条里遺跡・中村遺跡（以後一括して「有馬遺跡群」と呼ぶ）のような拠点集落が既に形成されており、沼田地域の開拓期に相当する頃（V—2期）には住居数も増えて、有馬遺跡群では集落形成の最盛期を迎えている。渋川地域と沼田周辺地域を比べれば、土器に見られたT字文の借用や地域色成立後の甕の相互流入などから、両地域の関係は密接なものであったことが理解されよう。それには当然、地理的に近接し交流が絶えなかつたことが大きな要因であろうが、沼田地域の弥生社会誕生に関しても、渋川地域の弥生集団が大きな役割を担っていた可能性を考えておきたい。

定着期 本稿編年の3期古から3期新に及ぶ時期に相当する。前述の各分割地域毎に定着し、安定した継続集落が形成される。加えて集落規模の拡充も見られるようだ。先に見たように、A地域では分断された台地毎に小規模集団が分在しながらも、相互に視認できる隣接関係から、ひとつの紐帶で結ばれた小地域集団を構成していた可能性が高い。また、D地域では戸神諏訪遺跡・石墨遺跡のような拠点集落の形成が注目される。その初期段階では必ずしも他集落を大きく凌駕する規模ではなかったが、順調に拡大、あるいは周辺への分村によって、D地域の中核的存在となっていったことが窺われる。その背景として、安定した広い水田可耕地の存在が大きな要因と考えられる。一方、北東部のF地域では、発知川、薄根川、小沢川の河川流域に形成された谷底低地に沿って、小規模な集落が進出している。上光寺遺跡、奈良原遺跡、門前橋詰遺跡等がこれにあたる。新たな耕地を求めての分村と解したい。片品川流域の段丘面に形成された上久屋橋場遺跡やG地域の糸井宮前遺跡なども同様な性格と考えていいだろう。以上のような集落様相にみる、地域毎の集落の定着と、そこから派生する分村により、集落分布は最大限にまで広がる。この時期には、先述の土器地域色が顕現しており、これによって全体がまとまつたひとつの大沼田地域社会が完成されたと考えることも可能だ。その場合、個別集落を基礎単位として、前述のA～H地域区分における同一地形のなかで共存する地縁的集団と、さらにそれらを結びつける沼田地域全体のまとめ

といった、重層する社会構造を想定しておく。ここで最も注目されるのは、地域の中で南端に位置する日影平遺跡と下川田平井遺跡の存在だ。すでに詳述したとおり、両者は渋川地域との交流拠点といった性格を有し、しかも眺望優先ともいってよい高所に占地することは、監視台的な役割をも担っていたことを想起させる。日影平遺跡が、後期としては数少ない防御的環濠集落の形態をもつことも、大河川の合流地点を見晴らせる最南端部に位置する、という立地条件と密接な関係があると考えるべきだろう。日影平遺跡の環濠は、どのような集団に対する防御だったのだろうか。各々の集落が環濠を具備する例の多いIV期（中期後半）では、個々の集落間における緊張関係を想定することも可能であろう。だが、日影平遺跡の存在した3期古～3新期には、少なくとも沼田地域の中で他に環濠集落は見られない。C地域の觀音前遺跡もその可能性があるが、詳細については明確になっていない。拠点集落と位置づけた戸神諏訪遺跡、石墨遺跡にしても環濠はもちろん、柵などの防御的施設の存在は否定的だ。このように沼田地域内での弥生集落を対比した場合、日影平遺跡が特別な性格を有していたことを想定せざるを得ない。すなわち、沼田地域内の弥生社会において、緊張関係をもった独立的集落だったか、あるいは、沼田弥生社会の南限における防御と監視的役割を担った存在であったかのどちらかと想定しうる。ここであらためて、表1の存続期間を見てほしい。日影平遺跡は3期古に形成され、3期新まで継続して以降には廃絶している。ほぼ集落の全域を調査しているから、前後の時期に延びることはまず考えにくい。前述したように、住居群は3段階の変遷を経たと考えられるので、継続期間は短くて50年、長くても100年末満と想定している。3期新は、町田小沢II遺跡で共伴した北陸系甕から、月影式併行と考えている。だとすれば、日影平遺跡の時期は、月影式併行期をふくめたその直前段階までの期間に相当する。これを暦年代に比定するならば、新しくは3世紀半ばを下ることなく、集落の成立は2世紀後半段階まで遡ると考えている。まさに中国の史書に記された「倭国乱」や「邪馬台国と狗奴國の対立」の時期に合致するのであり、それが群馬の地まで及んだとの実証は今後の問題としても、このような列島内の緊張状態と関連させて考えることは、あながち荒唐無稽とも思えない。近似した時期に、北陸～上越地方においても高地性集落が出現するなどの急変する社会情勢は、北・中信地方との交流を絶やさなかった当地域にも、情報として伝えられたのは間違いない。このように考えれば、日影平遺跡の環濠は、地域内集落間の緊張状態をあらわすのではなく、より広域な「クニ」同士の緊張状態に対処したもの、との解釈も許されるだろう。C地域に位置する觀音前遺跡がやはり同様な防御的環濠集落の形態をもつならば、こ

れは沼田地域弥生社会の北辺の守りを担っていたのではあるまいか。利根川右岸の崖辺高所に位置する下川田平井遺跡も、同様の役割を担い、同時存在した対岸の日影平集落との情報伝達を烽火等によって行っていた可能性も十分考えられる。では、具体的に想定できる敵対勢力は実在したのだろうか。繰り返し述べたように、南方の隣接勢力である渋川地域の集団とは、土器の様相や、石墨遺跡の円形周溝墓副葬品に見るように、交流の痕跡が濃厚である。それが友好的な関係か否かを実証するのは困難であるし、社会情勢の動向に伴ってその間係が大きく変化することもあり得るだろう。また、実際に大規模な戦闘行為が行われたとの物証も認められないことから、これ以上の憶測は無意味だろう。ここでは、列島内のどこかで起こったであろう戦乱や、「クニ」間における緊張関係についての情報を察知した沼田弥生社会が、具体的な敵対勢力の有無は別として、有事の際の対応策を図り、防衛上の要所である地点に防御的集落を設けたと理解しておきたい。

なおこの時期には、石墨遺跡と戸神諏訪遺跡のそれぞれで、小規模な円形周溝墓と、それと同一の主体部をもつ木棺土壙墓によって墓域が形成されている(図13)。両者とも居住域からやや離れてはいるが、同一地形面に位置することから、それぞれの集落に対応する墓域と考えていい。石墨遺跡例でみれば、6人の被葬者の墓と考えられ、鉄剣の副葬や鉄釧の出土が見られることから、集落の一般構成員ではなく、首長や祭祀的役割を担った中心的人物と想定できよう。墓形や、出土遺物の様相は、渋川地域の有馬遺跡群で見られる礫床墓群に類似しており、鉄剣や釧は渋川地域から、あるいはそこを経由して入手したと考えられ、渋川地域社会との交流関係を保っていたことを窺うことができよう。

再編期 4期～6期に相当する。前段階で形成された弥生社会が大きく解体し、再構成される。開析谷や小規模な沖積地に依存していた小規模集落はほとんどが廃絶しており、異なる地域に移転したようである。防御的拠点と位置づけた日影平遺跡や下川田平井遺跡も廃絶したと考えていい。そのまま継続するのは、拠点集落となった戸神諏訪遺跡や石墨遺跡だけだ。前述のように、戸神諏訪遺跡と石墨遺跡では、この時期から住居数が急増し、居住域が倍ほどに拡大する。この相反する集落の変化は全く偶然とは思えない現象だ。おそらく、何らかの事情により、周辺の小規模集落や防御的集落が拠点地域に移転合流した結果ではなかろうか。その一方で、新たな集落の進出が特筆される。D地域の向田遺跡とG地域の糸井宮前遺跡がそれだ。両者は、すでに古墳時代に突入した段階の5期～6期に相当する。土器の様相は、無文の在地弥生系土器を残しながら、器種組成には土師器が主体的位置を占めつつある。先述したように、糸井宮前遺

跡は一時期に10棟以上の住居群で構成される集落で、集落規模からみれば、日影平遺跡や下川田平井遺跡に匹敵する。このことから、日影平集落の移動した姿と想定できないこともない。向田遺跡も同様の規模と時間幅をもつと考えられる。これらが、前段階の弥生集落群と異なるのは、それまで形成されなかった地点に占地することだ。向田遺跡は、河川氾濫の危険性をはらんだ広大な低湿地に面しており、一方の糸井宮前遺跡は水田經營には不便な、むしろ沼田台地を眺望する絶好の高位置にあることは既に述べた。また両者の共通点として、一定量のS字甕が組成に加わることに注目したい。これは、北上してきたS字甕を持つ集団との接触度の高さを意味するのか、あるいは北上した集団そのものの姿なのか。どちらで理解するかによって、沼田地域における弥生社会の変遷過程について、全く異なる解釈が導き出せる。前者で理解するならば、在地弥生社会が新たな古墳文化を受容しつつも、旧来の社会的枠組みに大きな変化はなく、防御的役割を糸井宮前集落、新たな水田の開発拠点として向田集落を形成したと解釈できよう。後者ならば、沼田弥生社会に進出するための「橋頭堡」的な役割を担っていたとの解釈が可能である。ここでは、どちらかに結論づけるだけの有効な論証方法が見つからないので、これ以上の言及は控えるが、前段階までに形成された弥生集落が、自らの耕地や居住地を放棄してまで、北辺の拠点地域に集住する集落群の動向が、群馬県平野部で古墳文化を築きつつあった新たな勢力の北上によって促されたとの解釈は、けっして無理ではないと思われる。

沼田弥生社会の終焉は、この時期の直後に訪れる。全ての地域で集落が廃絶するのだ。拠点集落だった戸神諏訪遺跡も、新たに形成された糸井宮前遺跡も、一斉に終焉を迎える。その後、沼田地域での集落形成が再開されるのは、古墳時代中期まで待たなければならない。この、最大の画期こそ、群馬県東南部に巨大古墳が築造され、大規模水田開発が進んだ時期にほぼ相当する。沼田弥生社会を形成した集団が一機に全滅したとは考えにくいし、それを証拠立てるような人為的物証や自然災害の痕跡も認められない。環境に大異変でも起こらない限り、彼らは自ら築き上げた土地を放棄することはあり得ないだろう。唯一考え得るとすれば、集団移住である。若狭徹は、榛名山東南部の弥生集団が、その終末段階で利根川流域の平野部や赤城山南麓に移動したことを論じている(若狭 1998)。特に前橋市南部から太田市、あるいは利根川を超えた埼玉県北部に至る広範な地域に、古墳前期の集落が急増する事実は、在地弥生集団の自然増では理解不能なただならぬ出来事である。周辺地域における在地弥生集団の大量移住と解しておきたい。沼田地域でも、榛名山東南麓より一段階遅れて同様の動きがあった可能性は大きい。それが、自ずから選んだ途なのか、強

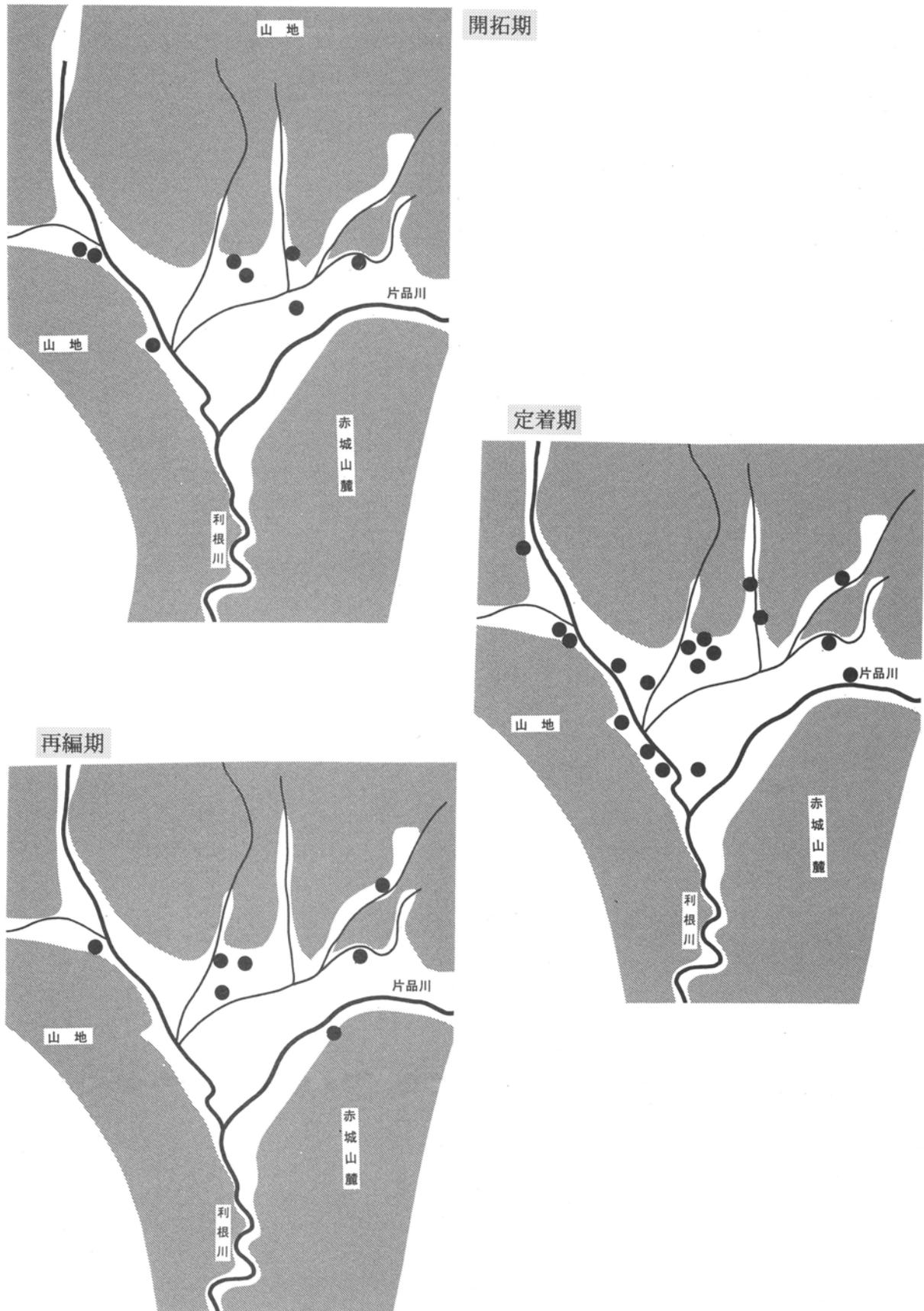


図18 集落分布の変遷

制的な植民なのは定かでないが、古墳社会形成の新たな枠組みのなかに参画することでしか、生き延びる方策はなかったのかもしれない。

沼田弥生社会がこの大変革期を迎える直前、渋川地域ではすでにS字甕に表徴される新たな集団の進出が始まっていた。利根川を挟んだ有馬遺跡群の対岸に位置する北橋村北町遺跡では、4期相当期にS字甕の導入が見られる。樽式系土器を残しながら、5期にはすでに土師器を主体とする土器群に転換している。それは、単に日用具としての土器を土師器に替えたに過ぎないにせよ、その後に続く地域的枠組みの激変を想起するならば、平野部を中心に進行しつつあった新たな古墳社会のなかに取り込まれたと考えていい。ところが、ここからわずか3km強しか離れていない北東の山麓部に、S字甕を受容しない同時期の集団が存在したのである。赤城村見立溜井遺跡がそれだ。調査地点で見る限り、その後集落は途絶えたと考えられるから、この地を放棄して異なる地点あるいは地域に移住したと考えている。南下して古墳社会のなかに参入したか、あるいは北上して沼田弥生社会に合流した可能性も考えられよう。それについては、有馬遺跡群を中心とした渋川地域における弥生社会の終焉過程を追うことで、あらためて論及したいと考えている。だが、いったんは古墳社会を形成する集団との合流を拒絶して移住したとしても、沼田地域の終焉を見るよう、最終的には古墳社会の中に再編成されていく運命にあったことは間違いないだろうと予測している。

5. 総 括

沼田周辺地域における弥生社会の形成とその変遷過程は、樽式文化圏の北辺部といった地理的環境から、閉塞的な地域社会が成立したと想定していたが、思いの外、列島規模に及ぶ社会情勢が如実に現れていることを見いだした。古墳時代前期における弥生社会の解体については、既に多くの論者によって言及されていたが、それ以前の弥生社会形成過程については、大部分の集落遺跡が後期後半や後期末の一時期に一括して扱われる事が多かったために、具体性を欠く場合が多かったように思う。それがために、拠点集落形成の背景や周辺の小規模集落との関係、また防御的集落形成の必然性などについて、他地域の弥生社会形成過程をモデルにした図式的な理解に終始してきた感がある。

拠点集落の形成に関して言えば、戸神諏訪遺跡に見られたように、有利な地形環境に恵まれていたとはいえ、当初から大規模集落を構成していたわけではない。その初期には、他の小規模な集落と同様に小地域内での沖積地開拓にはじまる。やがて地理的優位性を生かして小地域における中核的存在となり、外界の社会情勢の変動を契機とする、周辺集落の併合や集住によって、地域社会

全体の拠点的大集落へと変貌を遂げたのだ。開拓谷や小規模沖積地に面した小規模集落に関しては、ともすればこのような拠点集落を母村として、周辺に派生していく子村である、との解釈で捉えがちだ。しかし、沼田周辺地域で見る限り、開拓当初から小規模のまま継続するか、分村や移転をくり返して小地域集団を構成する様相がうかがえることから、そのような一辺倒な形成過程では理解できないことが判明した。

弥生時代は、稻作を主生業としていることで、集落間格差が生じ、それに起因する集落同士の軋轢と、これを解決する手段としての地域社会リーダーの出現や、暴力的解決法としての戦争行為があったと解釈されている。またそのような解決法をくり返しながら、次第に大きな弥生集団として地域社会が形成されるとの論法も多く見うけられる。だが実態として、どこの弥生社会も全く同じような形成過程と変遷を辿るものであろうか。実際には、自然環境の違いや、そこに定着した弥生集団の性格や個性、また他集団との交流の度合い等により、その地域に即応した独自の弥生社会が形成されたはずであって、その契機や変遷過程の理解について同一に語られる方が不自然だ。

沼田周辺地域における弥生社会で、調停役を果たしたと想定される首長や祭祀従事者の出現経緯の理解については是認できるとしても、拠点集落たる戸神諏訪遺跡の成立背景には、主に肥沃で安定的な水田可耕地や広域な居住地形などの地理的優位性に依拠していた可能性を強調したい。安定した耕地と居住地、さらに外界的脅威の少ない地理的位置が保証されれば、集落の長期存続と自己拡大があったはず、と考えるからである。だが、その場合の拡大の程度は、人口の自然増加率を大きく超えるものではなく、急激な拡大は周辺集落からの集住があつたため、と考えたのであった。

一方、各個別地域における小規模集落では、その分布状況や動態から、人口増加あるいは飢饉に対処するための耕地と居住地の安定化や拡大は、集落間の軋轢が生じない程度に自らの地域内で解決を図っていたと考えられる。また、これらの小規模集落のうち、一定期間を経て他地点へ移転する場合は、畠の嫌地現象や田地の水利環境の変化などが、大きく作用していた可能性を考えたい。まだ鉄製鋤鍬類の普及していない、当地域の弥生後期段階における打製石鍬出土率の高さから、高緑地での畠作に少なからず比重をかけていたことも推測されよう。水田可耕地ほどではないにせよ、集落維持条件に影響する一要素として考えておきたい。

日影平遺跡の環濠集落に見る防御的性格は、地域内集落間の緊張関係をあらわしたと考えるのでなく、むしろ、外界での社会情勢に対応して、沼田地域弥生社会総体の防備を目途としたものであると位置づけた。それと同様

に、小地域毎に展開していたそれぞれの弥生集団が、限られた地域に集住する現象についても危機感を孕んだ外界動勢に促されたと理解しておきたい。開拓以来、定着してきた自らの生活拠点を放棄してまで、拠点集落を中心とした北辺地域に集住したのは、労働力の結集による水田経営の集中化を目的とした、とする内在的背景で考えるのではなく、むしろ外部からの進入勢力に面した守りの姿勢であった、と考えておきたい。

ところで、沼田地域に弥生社会が本格的に形成されたのは、V—2期後半ないしはV—3期初頭における、渋川地域を有力候補とする他地域からの移住の可能性が高いことを述べた。このような集落動態は、沼田地域だけに見られる現象ではなく、群馬県内の他地域でも看取される。

県南西部の鏑川流域では、その上流域である富岡市周辺において、拠点的な大型集落が地域内の各所に展開するのが、ちょうどこの時期に相当する。「高地性集落」との評価で注目されることとなった中高瀬觀音山遺跡や上流域奥部に位置する南蛇井増光寺遺跡は、IV期（中期後半）にすでに集落形成が開始しているが、時間的間隙をあけて、V—3期から本格的な拠点集落としての展開が始まる。富岡市周辺のV—1・2期（後期初頭～前半）の遺跡は、中核的拠点集落である阿曾岡權現堂遺跡を除けば、小規模集落として散在する状況を示すから、V—3期開始段階で地域的枠組みの再編成があったと考えている。一方、鏑川上流域の吉井町周辺では、V—1・2期集落が多いにもかかわらず、その後に続くV—3期集落の存在が比較的稀薄な状況がうかがえる。県内で中期後半から後期にかけて、弥生集落の濃密な分布を示す榛名山東南麓ではどうか。ここでは、IV期からV期末まで継続的な集落展開を示すが、個別集落で見た場合、新保遺跡のような拠点は除くとして、周辺域を中心に、V—3期に新たな地点に集落形成が行われた様子が窺える。特に碓氷川流域の八幡台地近辺への集落展開は注目される。高位台地上の八幡遺跡、剣崎遺跡、少林山台遺跡などがその代表としてあげられよう。樽式文化圏のV—3期に始まるこのような現象を、新たな集落形成による地域圏の拡大、と捉えることも可能だが、沼田地域での弥生社会形成と連動させて考えるならば、これは人口増への対応や新たな耕地開発を契機とした「拡大現象」ではなく、別の外的要因を背景とした地域毎の集落群再編ではなかったか。土器編年を曆年代に比定するならば、IV期を1世紀中頃まで、その後のV—1・2期は紀元100年を中心に前後する頃、V—3期は2世紀後半頃から始まると現状では考えている。とすれば、V—3期の前半では「倭国乱」、後半では「邪馬台国と狗奴國の対立」が時代背景にあったと見ていい。それが列島内のどの地域での史実かが特定できない以上、過大評価するのは避け

るべきだが、鉄器や青銅器の流通に示されるように、当時の西日本弥生社会での社会情勢に関する情報についても、直接的でないにせよ入手していたことは間違いないと考える。西方の遠隔地で「大乱」が起こっているとの情報がもたらされた時、群馬の弥生社会はどのような対応を迫られたのだろうか。V—3期における地域再編の動きは、これに反応した自衛手段と考えることはできないだろうか。

鏑川流域の要所に位置する「高地性集落」として喧伝された中高瀬觀音山遺跡は、その防御的性格が強調されすぎたくらいがあって、あたかも目前に戦乱の危機が迫っていた、あるいは焼失住居の多さから実際に戦乱があったかのような印象を与えるが、実態としては、V期を通して100年ちかくの長きにわたった長期継続集落であって、危急事態に直面して形成された、その場限りの集落とは思えない。集落形成の契機を想定するならば、地域弥生社会を守る備えとして、あらかじめそのような危機を察知し伝達する、といった役割を与えられていたのではないだろうか。その場合でも、仮想する敵対集団がどこの、どの程度の集団なのかについては、考古資料から想定することは困難と言わざるを得ない。だがその主たる守備範囲は、かつて筆者が検討した「富岡型」壺・甕（大木 1997）が地域色として主体を占める富岡市周辺地域が対象であったと想定したい。

本稿で述べた沼田周辺地域の弥生社会の防御的拠点として、日影平遺跡の環濠集落を位置づけたように、弥生時代後期の段階では、樽式分布圏全域がひとつにまとまっていたのではなく、土器の地域色に表徴されるような各地域毎にまとまった社会が形成され、防御的集落形成にみるような危機管理体制にしても、地域社会が各々独自に対応していたと考えたい。

農耕社会の形成が「戦争」を生み出した、とは故佐原真氏の一貫した主張であった。また、列島内では生産力や武力のバロメーターとなる鉄製品や鉄素材の入手をめぐって戦争が起こった、との解釈多くの論者によって主張されている。当然のことではあるが、それは農業生産や物資流通といった側面で利害が衝突する集団間に限って生じうるのであって、利害関係を共有しないし、融通しある範囲においては、むしろ平安状態を保つ努力がなされたのではないだろうか。沼田周辺地域のような小規模な弥生社会では、内部の集落間抗争は、集落自体の壊滅に直結し、優位な集団にとっても労働力の減少から、集落の疲弊に結びつく。それは、地域社会全体の発展ではなく、むしろ衰退の途をたどることに他ならない。沼田周辺地域の弥生社会形成を理解する上で、集落間の闘争を想定しなかったのも、以上のような考え方によるものである。

戦争がそれまでの旧社会を解体して、新たな世界の枠

組みを形成してきたのは、歴史的事実である。だがその結果は、勝者の利が拡大されるのみで、後世に新たな利害対立の種を宿すことになるのも、周知の事実だ。世の中に安定した平和をもたらすために戦争をするのだ、というのはまったくの詭弁にすぎない。集団間の競争原理が、全ての人間社会に普遍的に存在したという根拠もない。もちろん、限りある資源獲得をめぐる利害対立、現状より安定した生活への欲求などは、集団間での競争や闘争を促す大きな要因となり、原動力として働くのは仕方ないことかも知れない。だが再度考え方直してみたい。戦争がもたらすのは疲弊と新たな対立を生むだけだということを。現代たる私たちが、過去の弥生人達が遭遇した経験や生き抜くための知恵に、学び取らなければならぬことはまだ多く残されているのではないだろうか。

最後に、一昨年に急逝された故佐原真氏とは、ついに親しくお話を伺うチャンスに恵まれなかつたが、奈良文化財センターの研修や、各地の講演会の場で氏の高説に接して、考古学的な学説はもとより、その研究姿勢や情熱に学ばせて頂くことが多かったように思う。弥生時代の戦争について語ったあとに、ドイツ語でエーデルワイスを唱った姿は、いまでも瞼に焼き付いている。特に、世界平和を希求する氏の情熱は、日本が50年間、他人との戦闘行為によって殺したり殺されたりしていないことは誇りに思う、との言葉とともに、筆者の心中にも深く刻み込まれている。だがついに、海外に向けて自衛隊を派遣することになった今の日本の現状を見たら、どのような感想を持たれただろうか。氏が後年、考古学の成果をいかに現代の直面する問題解決のヒントとして考えるか、について説き、後学にその使命を託したことは良く知られている。及ばずながら筆者も、それを指針として一地方の弥生文化解明に取り組んだつもりである。力不足ゆえ、重要な問題の見落としや曲解、憶測の類は多々あろう。先学諸兄の論説を誤解する点があつたらお詫びしたい。ご叱正、ご批判を願う次第である。

註

- 1) 神沢勇一は、関東地方における櫛描文の波及を示す竜見町式以後を後期とした(神沢 1966)が、当時、この編年の位置づけに同調する意見はほとんど見られなかった。
- 2) 比田井氏は解説(比田井 2002)のなかで、「竜見町式」の代表例を前橋市清里庚申塚遺跡出土遺物として掲げたが、これは「竜見町式」の新段階にあたるものだ。これより古相を示す例として富岡市の南蛇井増光寺遺跡、小塚遺跡、高崎市の高崎城遺跡、竜見町遺跡などがあげられるが、これらは中期後半に位置づけることになるのだろうか。同書籍シリーズ『土器Ⅰ』では、石川日出志が竜見町式を後期後半に位置づけている。地域間併行関係の再検討を提起されたものと理解するが、同一様式を中期と後期に分割して呼称することの混乱を避けたい。在地弥生研究者に課せられた急務と受け取っている。
- 3) 瓢内面を丁寧に研磨する手法を、箱清水式と樽式に共通する様式的

特徴として捉え「甕磨き技法」と呼称されている(青木・飯島・若狭 1987)。

- 4) 白色灰状物質についての科学的な分析はまだなされていないが、ドロドロの液体だったのは間違いなかろう。また同様の物質は有孔鉢にも認められることがあり、筆者はこの両者を組み合わせて調理等に用いる灰汁処理用ではないかと想定した(大木 1997)が、具体的な検証は今後の課題と考えている。
- 5) B類の形状が北毛地域の特徴ではないかとの指摘は、すでに飯島克巳と若狭徹によって示されている(飯島・若狭 1988)。
- 6) ここで示した時期区分はすでに若狭が示した編年観(若狭 1990・1996)を新たな資料で再検証した結果に過ぎない。特に4期(古墳Ⅰ段階)と5期(古墳Ⅱ段階)の理解については変更の余地がないと思われる。ただし、本論では集落動向やその継続期間を検討することに目的をおいたため、従来一括されていたV-3期を細分することに主眼を置いている。また弥生時代、古墳時代という文化背景を加味した時代名称を冠せずに、単なる数字で時期区分を表したのは、編年を時間軸上のスケールとしてのみ考えたからである。ここで土器変遷上の画期を想定するならば、若狭が示したのと同様に3期と4期の間に大きな落差を認めないわけにはいかない。
- 7) 発知川で水田を営む地元民の言によれば、用水の整備された現在でも、標高500m付近より以北では稲の生育条件に違いがあり、「コシヒカリ」のような品種は作れないようである。
- 8) ここでは、古墳築造をシンボルとして、大規模水田開発を可能にした、政治的かつ経済的にまとまったひとつの広域社会、という意味で用いている。

参考文献

- 相沢貞順・中村富夫 「群馬県北橘村分郷八崎弥生住居跡」『考古学雑誌』59-1
- 青木一男 1999 「長野盆地南部の後期土器編年(発表メモ)」『99シンポジウム 長野県の弥生土器編年』長野県考古学会
- 青木和明・飯島克巳・若狭徹 1987 「箱清水式と樽式土器」『弥生文化の研究4 弥生土器II』雄山閣
- 赤塚次郎 1990 「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 秋池武 1995 「諏訪原遺跡」『沼田市史 資料編1』
- 飯島克巳・若狭徹 1988 「樽式土器の再構成」『信濃』40-9
- 石川日出志 1992 「関東台地の農耕集落」『新版 古代の日本8 関東』角川書店
- 井上唯雄・柿沼恵介 1977 「入門講座 弥生土器—北関東3」『考古学ジャーナル』143
- 入沢雪絵・加部二生 2000 「群馬県地域における弥生時代後期の概要」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年』
- 大江正行 1989 「師遺跡・鎌倉遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 大木紳一郎 1984 「成果と問題点 1号住居址出土遺物について」『城平遺跡 諏訪遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 大木紳一郎 1997 「弥生時代の遺構と遺物」『南蛇井増光寺遺跡V』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大村直 1983 「弥生時代におけるムラとその基本的經營」『史館』15
- 大村直 1992 「古代東国社会の基盤」『新版 古代の日本8 関東』角川書店
- 大村直 2000 「弥生・古墳時代のムラ研究について」
- 尾崎喜左雄 1955 「各地域の弥生式土器 北関東」『日本考古学講座4』
- 柿沼恵介 1999 「概説 弥生時代」『新編 高崎市史 資料編1』
- 神沢勇一 1966 「弥生文化の発展と地域性 関東」『日本の考古学III』
- 工楽善通 1968 「北関東地方I」『弥生式土器集成本編2』東京堂
- 小池雅典 2003 「日影平遺跡」沼田市教育委員会
- 佐藤明人 1988 「出土弥生土器について」『新保遺跡II』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか
- 佐藤明人 1988 「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』
- 佐原真 1983 「弥生土器入門」『弥生土器I』ニューサイエンス社
- 設楽博巳 1986 「竜見町式土器をめぐって」『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』

- 杉原莊介 1939 「上野樽遺跡調査概報」『考古学』10-10
 杉原莊介 1955 「弥生文化」『日本考古学講座 4』
 関根慎二 1985 「成果と問題点 古墳時代前半の遺構と遺物について」
 『糸井宮前遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
 田口一郎 1981 「遺物の検討」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
 田口一郎 1998 「新たな土器が成り立つとき」『人が動く・土器も動く』
 かみつけの里博物館
 田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『第7回
 東海考古学フォーラム三重大会 S字甕を考える』資料
 田口一郎 2001 「東海系土器の末裔たち」『第9回 春日井シンポジウム
 東海学を深める～弥生から伊勢平氏まで～』
 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」
 『考古学研究』22-3
 友廣哲也 1991 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」群馬考古学
 手帳 2
 友廣哲也 2003 「古墳社会の成立」『日本考古学』16
 外山和夫 1982 「群馬県吉井町祝神の弥生土器」『信濃』34-4
 比田井克仁 2002 「関東・東北地方南部の土器」『考古資料大観 2 弥
 生・古墳時代 土器II』講談社
 平野進一 1980 「北関東西部における後期櫛描文土器について」『第1
 回三県シンポジウム 弥生土器・櫛描文の系譜』
 平野進一 1986 「解説 弥生時代」『群馬県史 資料編 2』
 平野進一 1988 「弥生土器の終焉」『群馬の考古学』
 水田 稔 2000 「第三章 弥生時代」『沼田市史 通史編 1』
 三宅敦氣 1988 「樽式土器研究の現状と課題」『東国史論』3
 三宅敦氣・相京建史 1982 「樽式土器の分類」『第3回三県弥生時代シ
 ンポジウム 弥生終末期の土器』
 三宅敦氣 1991 「町内遺跡I」月夜野町教育委員会
 三宅敦氣 1993 「町内遺跡II」月夜野町教育委員会
 山本良知・柿沼恵介 1975 「烏川流域の弥生文化」『水沼遺跡』
 若狭 徹 1989 「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」
 『群馬文化』220
 若狭 徹 1990 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手
 帳』1
 若狭 徹 1996 「編年 群馬県地域」『YAY!』弥生土器を語る会
 若狭 徹 1998 「群馬の弥生土器が終わるとき」『特別展 人が動く・
 土器も動く』かみつけの里博物館
 赤城村教育委員会ほか 1985 「見立溜井・見立大久保遺跡」
 北橘村教育委員会ほか 1986 「分郷八崎遺跡」
 北橘村教育委員会 1996 「北町遺跡・田ノ保遺跡」
 渋川市教育委員会 1986 「中村遺跡」
 昭和村教育委員会ほか 1985 「中棚遺跡—長井坂城跡—」
 昭和村教育委員会 1993 「川額軍原II遺跡」
 昭和村教育委員会 1996 「川額軍原I遺跡」
 白沢村教育委員会 1981 「寺谷遺跡発掘調査報告書(図版編)」
 白沢村教育委員会 2003 「寺谷II遺跡」
 高崎市 1999 「新編 高崎市史 資料編 1」
 月夜野町教育委員会 1991 「町内遺跡I」
 月夜野町教育委員会 1993 「町内遺跡II」
 沼田市 1995 「沼田市史 資料編 1」
 沼田市教育委員会ほか 1985 「石墨遺跡」
 沼田市教育委員会 1991 「奈良地区遺跡群(奈良原遺跡)」
 沼田市教育委員会 1989 「沼田市の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告
 書」
 沼田市教育委員会 1990 「町田小沢遺跡」
 沼田市教育委員会 1990 「奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡)」
 沼田市教育委員会 1992 「沼田市西部地区遺跡群II」
 沼田市教育委員会・群馬県企業局 1993 「戸神諏訪III遺跡」
 沼田市教育委員会 1994 「町田小沢II遺跡」
 沼田市教育委員会 1993 「上久屋地区遺跡群」
 沼田市教育委員会 1994 「沼田市西部地区遺跡群III」
 沼田市教育委員会 1996 「上光寺遺跡」
 沼田市教育委員会 2003 「向田遺跡」
- 沼田市教育委員会 2003 「日影平遺跡」
 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「戸神吉田遺跡」
 沼田市埋蔵文化財発掘調査団 1989 「上久屋橋場遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1982 「十二原遺跡 大原
 遺跡 前中原遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1984 「城平遺跡 諏訪遺
 跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985 「藪田遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1985 「糸井宮前遺跡 I」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986 「大原II遺跡・村主遺
 跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1986 「三後沢・十二原II遺
 跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989 「師遺跡・鎌倉遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989 「門前橋詰・舛海戸遺
 跡・高野原遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1989 「有馬条里遺跡 I」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1990 「戸神諏訪遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1990 「有馬遺跡 II」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 1993 「下川田下原遺跡
 下川田平井遺跡」
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか 2001 「石墨遺跡(沼田
 チェーンベース地点 I)」